

小田村様

二三一 西本清介植田乙次郎書翰榊取宛 慶應二年七月廿四日

今日も鬱々敷御座候處倍御清適と奉賀候然る廣澤君には遠方御苦勞相備
奉深謝候今朝御返答可被仰聞旨承知仕何時にも小生共は差支無御座候
間御都合次第拜趨可仕御場所等之儀御差圖被下候様奉頼候頓首

七月廿四日

尙々別冊拜借段々忝即返上仕候間御落手可被下候以上

西本

植田

小田村様

二三二 西本清介書翰榊取素彦宛 慶應二年七月廿五日

昨日も被召寄不相替段々御馳走被成下奉萬謝候いつも酔倒失敬申上候段
は幾重にも御仁恕奉希上候昨夜も尊翰被成下難有拜誦仕候即刻奉請可仕
候處甚等閑至極多罪御海容奉願上候爾來倍御安泰可被成御興居奉并喜候
不存寄御幽囚中御挨拶と被爲在御國産之佳品御惠投多々奉謝候乍併種々
御厄介罷成候上右之仕合何共痛却仕候任仰奉拜受候いつれ從是御禮可申
上と奉存候平司謙介之尊翰歸國早速相達可申と奉存候不日拜鳳可仕其
節可奉多謝一應拜復昨日之御禮旁草略申上候頓首

七月廿五日

二白 被是久々御厄介相備殊に段々御丁寧之御扱奉感謝候右御禮も申
上度彌今日出足仕候付御挨拶旁參上可仕等候處其儀不仕候段御海涵奉
希上乙次郎も可然申上候
諸君にも宜御傳達奉憚度奉存候將家來共へ迄御品被下難有頂戴爲仕候
是亦恐怖之至奉存候再拜

晩稼老臺

閣下

二三三 藝藩玖島出張藩士書翰

〔長藩出宛 張藩士〕

慶應二年七月廿六日

〔端裏書〕

七月廿八日夜玖島陣處迄來る

〔附箋〕

七月廿八日夜中

本書藝藩出張場白砂口玖島鴻軍城本陣に持せ來り候に付早速鈴尾殿へ相伺及返答候返答大意貴藩の御内使被差越候趣に付役方之者の進軍不仕様申聞せ其説を守り居候得共貴藩の臣子之職を被盡候進戰

に候は、此方も可及覺悟候云々

一翰致進呈候秋暑之節久々御出張御苦勞奉存候然る過日は諸君白砂廿日市迄御足勞被下辱其節御談判致候通り兼而之御國論を信し何事も公正之御處置と存し此度御進勢之趣も終に 閣下の御出之由に而弊藩の御對被成候而は焚劫抄掠等は固く御誠只假道而已と被仰越候趣も有之候處先日小方大竹邊之御次第は公正之御處置とも難申就中淺原中道等之御所業は尙更不得其意雖然於弊藩は一途に 皇國之御爲と存し難忍を忍ひ此場合にも諸藩の使价を馳せ周旋中に付友田津田邊に於て御應接御談判之上雙方相引之御約仕廿日市迄人數引上候處豈料直に御闌入間道を御潛行被成候次第是以御違約と相成如何にも慚憤に堪へ不申是迄御國論を信し小方大竹淺原中道邊之事も御座候得共御國情鬱塞かして餘激之所發歟と乍迷惑自恕いたし居申候處御背約之一事に至り何事も皆御詐道に出候義と

始る承知仕候尤再度御談判之趣に於ては御手違を御進勢に相成候義と被仰聞候得共既に相引之御談判いたし候儀を御承知之上は速に御引拂可相成筈と存候處依然御屯集被成候次第全く變詐を以侵掠被成候義と被相考候斯御詐略に陥り候儀爲士之道に於て上は寡君父子下は百姓に對し何とも面目無之且列藩の恥辱等左思右慮致し候得は心魂分裂致候此餘は微力を盡し御支申外無之候乍去弊藩より兵端を開候心底には無之奉君命守領地而已之職分に御座候間速に御引拂に相成候得は則已無押御通行被成候得は弊甲を以相見へ候にも立至り可申何分依然御屯集御引拂に不相成候は一同大に疑惑を生し凝結難解候間右相引之御約定不致以前へ引返し封疆守衛之職を盡し度存候間早々御領内の御人數御引上可被下候此段得御意置候草々不宣

七月廿六日

藝州

出張各中

長州

御出張各中様

二三四 藝藩玖島出張長藩士書翰

〔出張藝藩士宛〕 慶應二年七月廿八日

當月廿六日付貴札只今相達致披見候處弊藩同勢御領内引拂方之儀御疑惑之件にも相涉候哉に候得共此議に就るは追々申演置候趣も有之且又過る廿日弊領高森驛迄御内使を被差越候御様子に於右御談判之趣安藝守様御内慮之旨も被仰越此方も及御相答にも候由に於今一應折返御内使被差越候迄は只今之屯住場所か一步も進軍不仕様との儀一昨廿六日夜役方致通達候故其儘踏留り何分之差圖相待居候處今般意外之御書面に相預り如何之御行違に候哉尤不得止御封疆御手衛之職を御盡し被成度との儀に候は、不及是非に候乍併兼申演置候通貴藩と兵端を相開候儀甚不好儀に

候得共強_ろ御職分を被盡度由に_ろ御構戰にも到り候は、此よりも無據其覺悟仕度候外は無御座候右爲御答如斯御座候以上

七月廿八日何時

長州出張

各 中

藝州

御出張各中様

二三五 藝藩玖島出張藝藩士書翰〔出張長宛〕

慶應二年七月廿九日

〔端裏書〕

此分八月朔日小瀬川游撃軍_ヲ傳致

廿八日夜半御發_之御返翰只今相達致披見候然_ハ先書申述候儀に付行違_之義可有之との旨いか様先日差出候内使者罷歸様子承候へは段々御談判仕候義も有之尙御再談致候迄は依然罷在候様申來候彼是行違_之義御諒察可

被下此上は御陣所へ推_る罷出候義は不仕候畢竟相引_之御背約_ヲして先書申上通り是迄_之御國論に反し詐謀にも出候義と諸隊一同君民并諸藩_ノ對し何とも慚憤に堪_へ不申_之様成行候次第に御座候間此段御推恕臣子之情分相立候様御深考被成下度奉存候尙再使罷出候趣に御座候間左様御承知可被下候尤幕軍は進勢_之由に候へ共此義は我輩_之所知に無御座候間萬々御分辨被下度奉存候右要旨取東復答迄如此御座候草々頓首

七月廿九日

藝州

出張各中

長州

御出張各中様

二三六 目加田喜助書翰〔廣深兵助・榊取素彦宛〕 慶應二年七月廿九日

(端裏書) 七月晦日朝岩國の到來之分

一翰拜呈仕候殘暑退兼候處各様益御忠壯可被爲在御動止奉恐賀候然者過日植田乙次郎罷越候節大島郡久賀安下庄井上之關等は東軍の砲撃手始之日柄始末等諸藩にも書付見せ度由に而書記し吳候様被相獎候處此方に而は巨細難相分殊に他藩にも見せ候事に候得は認方之御都合も可有御座と奉存候旁何卒山口表におゐて御取しらへ之御都合に御運ひ被成下候といつれ近々植田渡海之筈に御座候得は御相對も可有御座其節各様を御渡被下度被仰合被下候様奉希候右要件迄勿々如斯御座候頓首拜

七月廿九日

目加田喜助

廣澤兵助様

小田村素太郎様

二三七 目加田喜助書翰 [廣澤兵助・榊取素彦宛] 慶應二年七月廿九日

追啓

別封一通今夕藝藩を飛脚を以到來に付差上申候尙飛脚之者は明日中滞留申付置候間御返書も御座候は、其内御差送り被下候様奉存候且又私共の書状も備 高覽候別紙認後到來大略失敬之段伏而御赦免奉希上候以上

二三八 目加田喜助書翰 [廣澤兵助・榊取素彦宛] 慶應二年七月晦日

(端裏書) 七月晦日夜岩國の到來

(附箋) 此分返書隊長河本源六不在に付伍長金作と申者の渡置候由孰も野兵頭と有之

態々謹呈仕候兎角殘炎難退候處各位愈御清適可被成御座奉拜賀候陳者藝
藩方之書狀昨夕差上候處何等之儀申越候哉不苦儀に御座候得は奉窺度御
繁劇中御手数之儀奉恐入候得共御寫に亦も拜見被仰付被下候は、難有仕
合奉存候右御頼旁奉得尊慮度勿々如斯御座候頓首

七月晦日

目加田喜助

再陳 藝飛脚留置候趣申上候處昨夕和木大竹邊にいつれ之船共不相分
及砲撃候次第も有之候故飛脚之者は一應差歸申候此段も申上置候以上

廣澤兵助様

小田村素太郎様

侍史下

二三九 廣澤兵助楳取素彦書翰

〔西本清介宛 植田乙次郎〕

慶應二年七月晦日

過る廿八日御仕出之御書翰相達奉別後彌御健剛可被爲入大賀仕候高森御
滯留中も混雜之中故御不都合計甚失敬汗顔之到に奉存候然る處御歸藩も
風潮不順に御遅延に相成其砌御行違之儀より尊藩人心疑惑之件も出來
仕右之機に乘し幕軍より尊藩兵機を鼓動仕候姿にも推移り安藝守様を始
奉り御役方にも御苦慮不一形哉之趣何共御心痛之程想像仕候乍去元來
御闔藩之御持論にも無御座兼被仰談候御宿志は必定御遂被成度との御
衷情に御座候は、只管御違約とは不相考候此段御安心可被下候拙生共兩
人儀は奉別後直様屯處巡撫各位と御約條仕置候件を申聞せ只今之屯處
は一步も進軍不仕様及曉諭に置候故定此より暴動は仕間敷哉に奉存候
何も御面談之上ならては難相盡候間必々今一應御越被下度候様奉待候右
爲貴酬草々頓首

七月晦日

廣澤兵助

小田邨素太郎

西本清介様

植田乙次郎様

各位下

二白 屯處巡撫中故只様御飛脚之衆爲相待候只今高森歸宿即刻此書相認御飛脚の相托候幾重も御答遅延之段御海恕可被下候以上

追書

黒田了輔儀 尊藩迄渡海之儀差急已に高森迄出浮居候間自然も各位御越に相成候は、御手船新港の被留置同人儀渡海相成候様奉希上候此議も乍序申上置候以上

同日

兵助

素太郎

清介様

乙次郎様

二四〇 藝藩出張御楯遊撃隊書翰〔藝藩隊中〕 慶應二年八月二日

(端裏書)

八月二日御楯遊撃合議に友田へ差廻候分

引續き御在营御苦慮之義に奉存候扱も追々得貴意候當口出張之義に付意味違之事件有之を以て今日之勢何歟尊藩と圭角之姿にも相見候處此間西本清介植田乙次郎之御兩使尊藩

御父子様之御内命を以態々弊藩御越に付役方之者御相對候處件々之被仰聞早速寡君父子の申入候に付寡君に於るも尊藩御父子様之御厚意を被致銘肝候事に御座候然處當手於出先追々御掛合に及候様子を被聞餘程被致苦慮候由に改不日に人數是迄之屯處の引揚候様唯今重役之者を以被申付出先に於るは一紗迷惑不少候得共今日迄決死致突入候も全寡君之冤

罪を雪度心事切迫かして之事に候處尊藩御父子様之御厚意と申寡君之嚴命押る致滞陣候様にも難相成に付不得止兩三日中には當手兩口之人數一應先屯處迄引揚候間戰士一紗之心事御察被下前日被仰越之御國論彌御確守被爲成候様致懇願候先は爲其得御意置候不具

八月

二四一 植田乙次郎立野一郎書翰「玖島出張宛」 慶應二年八月六日

尙々御差急之御様子昨日御書中之趣も有之候間此紙面御答書不被下

内押る罷出候積に御座候間差支へ無御座候様御取計方奉願候

一書拜啓仕候然は小生共小田村廣澤御兩君へ爲御面會罷出只今葛原著仕從是直に玖島迄罷出申候間御關門等差支無之様且右御兩君にも玖島迄乍御苦勞御來責被下候様御通達之義奉願候并薩藩篠原冬一郎も同道仕候間右様御承知可被下候

八月六日

立野 一郎

植田 乙次郎

玖島御出張

各 中 様

二四二 福岡藩有志書翰「楳取素彦等宛」 慶應二年十一月

一翰拜呈仕候嚴寒之節に御座候處愈御壯勝御旅行被成奉欣然候然は逐々御承知も可被成弊藩國論之體勢昨年來大に變動致正議輩も禁固幽閉被申付頃日に至候は増々因循に流入正誼恢復之程も難計有志之輩深く痛心致事共に御坐候於尊藩に増々正議御主張被爲成候御模様實に御頼母敷奉存候極る承知之通り世子君登京被致候處上國之形勢も委曲不承如何共も可相成候哉就右には弊藩國論之處も一新可仕も難計は候得共可相成は

尊藩之御盡力速に正議快復いたし諸有志輩祝眉を一時に開き候様御周旋も被下度候尤歸路には是非とも御領海通行も被致候義に付屹度大夫に御突込被爲下國元正邪之辨別相立以前正議相唱候重役之面々再度執政いたし國論一變致尊王攘夷之大典確乎振起仕候様偏に御盡力之程奉希候尤僕輩私願に非らず皇國之御爲一藩正議に復し候へは乍恐宸襟を奉休候一助とも可相成奉存候僕輩か微心御推量被爲下曾皇國之御爲深奉依頼候前文之趣意可然御汲取被下重々御周旋御盡力奉頼候尙々御國論之御趣意も一應拜承仕度候右等之義は脱走人も罷居候義に付同人等迄委曲御傳達被下以便宜を拜聞可仕候右御周旋成否有無萬端御傳達奉頼上候

再々白 如前文御依頼申上候得共弊藩之起合振候へは尊藩之御模様も有之義に付有志輩壹兩人罷出候可然哉何共可然右等之義御指圖被下度候

筑藩

有志中

十一月

- 鹽間鐵藏様
- 林萬樹多様
- 林勝七郎様

御侍史

二四三 寺尾生十郎等書翰

〔楳取素彦宛〕 慶應二年十二月四日

托幸便一書謹呈仕候時下甚寒御座候所愈御壯健御奉務可被爲在と奉恭賀候然此度道家牧太岡田嘉治馬と申者尊藩へ爲使者罷出候間不相替御世話に相成り可申萬々御心添之程奉願候隨近頃輕微之至甚以奉恥入候得共何角之御挨拶等取束一同方龜品一箱獻呈仕候間御笑留も被成下候は、

本懷奉存候吳々も龜末之段汗顔之至に御座候右爲可申上乍大略一紙を以
如此御座候恐々頓首

十二月四日

寺尾生十郎
植田乙次郎
久保田平司
西本清介

小田村素太郎様

二白 先頃は宍戸大夫何寄之品預御惠贈難有奉存候全體書翰を以右
御厚禮可申上等之處取紛別段呈書不仕候間乍憚賢兄可然様御執成之
程奉願候且又菲薄之品甚奉愧入候へ共別副之通御手元迄差出し申候間
乍失敬御序之節宜御取計可被下奉願候誠に大略之段萬々不惡御寛恕可
被成下候以上

覺

一天鵝絨氈

三枚

右宍戸君の四人の差出申候事

二四四 楳原治人書翰

楳取素彦宛
前原彦太郎宛

慶應三年正月十一日

一筆致啓達候各位爾後曳續御盡力之程奉愚察候過る五日小倉人馬關へ御
呼寄相成候哉尙其節之御模様如何哉素太郎様御歸山只様御遅延に付何そ
御様子振り有之事歟と致愚慮候尤五日彼致出關候^{被力}被仰聞候儀に付一應
罷歸衆議之上罷出御談可申上と之次第に候は、彼是日數も可相立に付無
御餘儀素太郎様御滞在被成候事歟共奉推察候乍恐
公上彼是御懸念被遊候御様子にも奉伺候に付何卒其後之模様被仰越被下
候様仕度儀に御座候爲其如此御坐候恐惶謹言

正月十一日

治人

幹花押

素太郎様

彦太郎様

二四五 高杉晋作書翰「楳取素彦宛」 慶應三年正月十三日

落花斜日恨無窮自愧殘骸泣晚風休怪移家華表上暮朝欲拂廟前紅

黃昏閉戸小齋靜對壁又無感慨催探句漸成挑燈火思朋不到攪爐灰忘飢芋
粥止三椀療病菱釀只一抔窓隙忽看透山月遠望鳴鶴數聲回

汚

玉瑤并乞

些々生拜

正

其後如何被爲有候哉小生も依舊碌々困臥御冷笑可被下候昨夜不眠漸汚
玉韻候付供 一笑候頓首

十三日

東行生

小田邑様

二四六 尖戸璣書翰「楳取素彦宛」 慶應三年三月十八日

追付倉使應接可仕心得に御座候扱別昏御停止觸小倉より企救郡の沙汰い
たし候趣に木村久兵衛より申越候彼藩心底過日織江一建涕泣歎願之時
節とは事變り當度之大變を幸とし異心を抱き候模様には共は無之哉と切齒
罷在候間應接上にて少しは可承心得に御座候就るは鴻城におゐても先
日之涕泣而已を御不便不被 思召彼之狡猾瀨踏を致し候様事件も相知れ
候方可然と相考一應入御覽候御都合次第御寫し取らせ被成御持歸り被成

候亦は如何哉と奉存候此分今日は御草臥可被成只様及長談奉恐入候扱先程御噂仕置候藤竹席獻納仕候間御面倒なから玉臂を被爲居候は、千萬ありかたく奉存候先は爲其如此御座候頓首

三月十八日

尙々此いちはず數莖源八々晩翠先生へ獻し度との事に付持せ差出し候間御落手奉願上候

巽庵生

棋山先生

拜呈

二四七 松原音藏書翰「榊取素彦宛」 慶應三年四月十六日

御細書忝奉拜見候如仰杜鵑之時節新緑勝花朝暮之風光一段之事に御坐候處御満堂様彌以御多祥可被爲在と奉大賀候迂生も海軍壯士連々引立られ

碌々日を送り頃日は學校轉移之論儀にて少しは用事も有之つまらぬ事に御座候扱高森之結局も稍片付候様に御座候得共下より申立候通り別端御威光も薄く相成恐入候事に御坐候後藤深藏も宮市驛に出浮不申いまた元之通りに行はれ候様不奉考何卒正氣御引立被爲在度事に候嚴公も御快氣之程も六ツかしく由承り上には別々大事に御坐候馬關之谷潜藏も全快之目途手元無之海軍にて余程骨を折候人物に河野又十郎長野昌英四五前々見舞に遣し昨朝歸着承り及候處兩人も漸之事にて一面會いたし候得共船はいつれの着候かと申事計が實語之様に被考餘之事は眞らしき辭も無之大煩悶之體に相見へ百姓之蜂起氣にかゝり山口は只今出浮候など、其中にも國家之大事を忘すれぬ様子に御坐候しかれば此程之事心中に案思居をのつ脱カから吐露いたす譯にて誠に苦心之至可賞可歎難儀之次第涕泣して想像仕るのみ御了察可被成候過日來追々申上候通り鴻城之動搖はか様之次第になるは必然之事に候國重之石州行は實にをかした事にて同役柿

並山彌正市など位は子供之様に考へ時々論議にも及候儀有之御互に同論物に付疎外しられ候は尤に御坐候木準を出し候譯は屬吏など伊勢翁の彼れを取込み餘之人に悪尻をはくらせ間敷策之糸賀金頭木準など御差出に相成候得は定而御爲と相成候半ん頃日世上は色々札入をいたし追々其策に出候に付人心悉はなれ屬吏も少き箱丁ちんを燈し早曉を年禮にありく様に今に成可申候涙之こほれ候事に御坐候承候へは勢州翁も歸萩とか申事嘸々取とめなき次第と可見見るへし小生傍觀仕候様に候得共變動前々防州に居殘之物ものは私壹人にて別端激に出候ものか邪魔になり昨年も少し轉効之模様有之今年は海軍を望まれ候を幸ひ差出され君上もやんことなき御意を蒙り此儀に付るは一時一刻も油断はならぬ形勢又御存之通り譯もなき激論時々差起り頃日共は別る僻論生し勝ち漸山口に申出たる位に鎮撫御憐察可被下候しかし強く形勢も違ひ候へは歸山仕不及なから一論仕度候又々被仰聞候様奉頼候實は歸山之覺悟なき

にしもあらず候得共臨事きたなく様に否は心にも濟まぬ思ひいたし大方見限る時節なるらんと考しはらく海軍計之世話に取かゝり居多罪萬々辨するに暇あらず御ゆるし玉はるへし此間は晚翠翁としはく笑談江山流水之樂みはかり面白御坐候御聞取可被下候大津醉翁は不平も少しは有之歎の由此中來承り候根元之處加様相成候と彼役所ともに萬事行ひ難き事件はかりにて無之難儀に可有之候半ん○小倉御令弟當時小松辰三郎君歸中にし濱に御出被成候由赤川氏を御状も來り委細は平野屋嘉兵衛を御聞取可被成候早々備前下津井迄なりと御申越被成早々御歸國被爲在候か一番よろしく儀に奉存候當分三田尻に滞留被成一應御答め相濟候上は御用に相立可被成候は必然之事に付小生も御相談仕り御世話申上度平嘉の御示談被成下津井へ幸便御行肝要之儀に存候
軍艦萩廻りも近日試之運轉仕候へは促され可申候近日其内
儲公御出被遊候御様子も杉を申來居候先是を濟せ度存候又々申上候淀の

川瀬の水車さかしに廻らぬ様になるかよいくくくよいやさア御投
火を是祈候不一

初夏十六日

をり江

より

後河原様

二四八 野村望東書翰「楳取素彦宛」 慶應三年七月

秋たちも猶さりやらぬあつさのなかきをもとひまつらす過しころみこ
ちもれいならすわたらせ給ひよしそのころよりとふらひ奉らんと思
ひきこえ侍るをりからおのれもこちそこなひ侍りいまた常のやうにも
侍らねは心の外になむいまははやみけしきもすしうわたらせ給ふらん
いも君御子かたにもあつさにさわらせ給はておはしますらむとよろこひ

まゐらすになむさて御咏草もはやく拜見と存乍さまくとりまきれや
うくこのころ拜しはてたれはもてまかりいつへく思ひまつるをりから
こちそこなひはた玉まつりにもなり侍れは中くなる御さまたけか
てあまり久しうちたえまゐらせ御なつかしさも山々むくひのつみもさ
りあへねはたよりにきこえ奉るになむ
いも君にちきりまゐらせしこともおはしますをかくうちたえ侍りてはみ
ないつはりのことくにこそなり侍らめくれくよろしうきこえあけさせ
給ひてようし残暑御いとひ過させ給へかしいさよひはかりにはかならず
まゐりてこそあなかしこ

望東

先の月のすゑつかたより吉田屋にうつり侍りぬよろつの御しむけ誠に
くかしこみ奉るうへに

御二殿様の御前よりいろく拜領被仰付まことにくありかたしとはお

ほかたの事にて身のさきはひあやしまて思ひたとられ侍りぬついでに末
つかたにきこえ奉るはいとかしこくなめしけれとみまのあたりと思ひつ
るにひをかさね侍ればあらましきこえ奉りぬあなかしこく

二四九 西郷隆盛書翰「品川彌二郎宛」 慶應三年十二月廿一日

別紙之通只今申來候付相分り候義は卒度御書付被下爲御知被下度奉願候
頓首

十二月廿一日

西郷吉之助

品川 矢次郎様

要詞

二五〇 西郷隆盛書翰「楫取素彦宛」 慶應三年十二月廿六日

別紙御願書昨夕御返却可仕之處甚以不埒之仕合御座候右之御文面に付決
る違存は無御座候付返上仕候間御落手可被下候以上

十二月廿六日

西郷吉之助

楫取素彦様

要詞

二五一 西郷隆盛筆協議書 慶應三年十二月下旬

- 一 御決策相立候は、一發前夜
- 一 御微行之方可宜哉之事
- 一 炮聲相發し候節に臨み堂々と
- 一 鳳輦を被移候方可宜哉之事
- 一 山陰道に御掛り被爲在候可宜哉之事

- 一 朝廷におひては總裁御止相成候方可宜哉之事
- 一 浪花之戰と相成候へは京地にては依然として御動座無之方可宜哉之事
- 一 中卿は是非御供不相成候るは不相濟由其外幾人にも可宜哉御供之人數
輿丁人夫等之手當も調置候様との事
- 一 御警衛之人數可相究置との事
- 一 岩倉は如何にも跡に陥止り彈丸矢石を犯し十分戰鬪之賦

二五二 山田顯義筆協議書

慶應三年十二月

- 一 當所居合之三中隊之御所警衛は御微行相決候上直様供奉之事
- 一 西ノ宮邊三藩之兵直に有馬々三田通り丹波笹山の引揚之事
- 一 東福寺光明寺之兵は平公を將として伏水邊衛殿之事
- 一 伏水衛殿之我兵引揚候節は一先天龍寺の集合之事
- 一 尾ノ道の兵は備前兵と合し姫路を突く

- 一 藝備の急速出兵之事
- 一 雲州の急速手下し之事
- 一 高野之兵速に大和より宇治通り伏水に出張衛殿兵に相應すべし
- 一 兵庫滯泊之我軍艦速に備海邊の廻すへし

二五三 林友輔書翰

「山田顯義宛」 明治元年正月二日

今日は御出陣被下何之御會釋も不致得失敬候段御高許是祈
只今龜甲屋善五郎伊勢屋何某兩人の報知之趣今晚より會藩千人歩兵貳千
人程明日に懸け西街道京都罷登候趣申出候付薩邸にも聞合せ爲致候處彼
方にも同様承知有之候へ共何故登京致候哉不相知何ぞ歎願共に可有之
様申分に御座候元々是迄上京被差留候御沙汰も無之事に付於途中差咎候
様にも不相成折角當驛巡邏之命を承り居候に付行懸り臨機之取計は致候
共半途之事故甚窮居候其内只今の京都の御伺出相成候るは如何御座可有

哉何分御熟考之上可然御取計相成度奉存候先は不取敢一通り御報知申上候草々不一

正月二日

十時二十五分

林半七

山田市之允様

大急

二五四 長松文輔・山田顯義書翰

〔楳取素彦・片野十郎宛〕

明治元年正月二日

別紙只今報知有之候間即持せ差出申候尾公歸京後之景況何歟變態も可有之と御一報相待罷在候得共強而何たる御報も無之故今日長松生態々罷越候處不幸御他行何も不得御示談乍遺憾罷歸申候處不計も右報知有之朝廷邊にも何歟御異論相生候哉と奉煩念候何卒急速い細御趣旨御答可被

成下候様奉希候頓首

二日夜

長松文輔

山田市之允

楳取素彦様

片野十郎様

編者曰本書者山田顯義筆也

二五五 山田顯義書翰

〔楳取素彦・片野十郎宛〕

明治元年正月三日

時機到來御同慶此事御座候就るは老坂邊之事如何相成居候や急速御手下申も疎に奉存候昨日來浪花より送來候兵糧船於途中少々要せられ候由申參り左次第に而は西ノ宮殘兵孤立之勢に可相成候間急々光明寺へ其段御傳奉希候何れ早急御國元にも御一報有之度申も疎に奉存候兎に角急速大號令汗發機に後れぬ様專要に御坐候何分主客變勢第一之著眼に可有之奉

存候浪花へ何藩よりなりとも早速御出可然敷に奉存候先は氣付迄草々頓首

三日

山田市之允

楫取素彦様

片野十郎様

二五六 西郷隆盛書翰〔楫取素彦宛〕 明治元年正月三日

御返書忝拜誦仕候陳は鳥羽街道にも出懸候半敷と相察候付彼方にも手配仕候付御含置可被下候尤戎装に於登京之義は何分朝廷より之御沙汰有之迄は相控候様巡邏之三藩より談判に可及趣は只今御伺申上置候付左様御納得可被下候此旨又々奉得御意候頓首

正月三日

西郷吉之助

楫取素彦様

要詞

二五七 西郷隆盛書翰〔廣澤眞臣・井上馨宛〕 明治元年正月三日

別紙之通東久世様より御達相成岩下佐次右衛門に名代承候を御通申上候様との事に御坐候に付早々爲持差上候付御落手可被下候此旨乍略義以書中奉得御意候頓首

正月三日

西郷吉之助

廣澤兵助様

高田春太郎様

拜呈

二五八 福岡孝弟書翰〔楫取素彦宛〕 明治元年正月四日

楫取素彦様

福岡藤次

私儀今日は總裁局職掌書草稿仕候を以遅參之譯申上置候處今朝來右草稿
に取掛何分勿々に出來候儀も難相整愚を盡及ひ兼申候に付明日迄御待被
仰付度依る今日中參上御免被仰付候様宜御取計之儀奉願候以上

正月四日

二五九 品川彌二郎書翰〔廣澤眞臣・寺内暢三宛〕 明治元年正月七日

先般建言之次第も有之候處豈圖んや松平修理大夫家來とも幼帝を要し公
議を不盡 叡慮を矯め天下之亂階を醸し候件々枚舉に不暇依之別昏兩通
之奏聞を遂大義に倚て

君側之惡を拂らひ候に付速に駈登り軍列に可相加者也

臣慶喜謹て去月九日以来之御事件を奉恐察候得ば一々 朝廷之御眞意
に無之全く松平修理大夫奸臣とも隠謀を出候は天下共に所知殊に江戸
長崎野州總州處々に亂妨逆盜に及ひ候も同家々來之唱動により東西響
に應し 皇國を亂し候所業別昏之通にて天人共に所惡に御坐候間前文
之奸臣とも御引渡し御坐候様御沙汰被下度萬一御採用不相成候は、不
得止加征戮可申候此段謹て奉奏聞候

正月

慶喜

薩藩姦徒の者罪狀の事

- 一大事件公議を盡すと被仰出候處去月九日突然御改革を口實と致し幼
主を奉侮諸役御處置私論を主張候事
- 一主上御幼冲之折柄 先帝御依託被爲在候攝政殿下を廢し參内を止め
候事

一私意を以て宮堂上方を恣に黜陟せしむる事
一九門其外御警衛と唱へ他藩のものを煽動し兵仗を以て宮闕に迫り候
條朝廷を不憚大不敬の事

一家來とも浮浪之徒を語り合屋敷へ屯集江戸市中押込強盜致し酒井左
衛門丞人數屯處の炮發亂妨其他野州總州處々燒打劫盜に及び候もの
證適分明に有之候事

又

去正月三日夜半滯坂之諸外様の布告致し候事
唯今寺島檜兩氏大坂を歸京別番之通大坂に布告候之由に付何分大御布
告早々御運び候様御盡力申も疎に奉存候兩人は五日朝坂地出足前に何も
相替り候義無之候

七日夜

尙々高田は無事に西の宮通行のよし御安心可被成候

日剋一紗河原邸へ轉陣仕候

橋 八

廣澤様

寺内様

二六〇 西郷隆盛書翰「楳取素彦宛」 明治元年正月八日

如命寒夜毎々及深更御苦勞奉存候扱西之宮の御書面參候由篤と拜見仕候
御使早々盡力可仕候爲其一人參居候者も御坐候間早々申聞爲取計可申候
貴答迄如斯御坐候以上

正月八日

二六一 廣澤眞臣筆奏聞書案

明治元年正月十三日

宇和島少將

一手

右橋本柳原二卿爲御守衛大津口に出張被仰付度事

但當藩之儀は列藩に拔る軍制を相整居殊更壯士輩奮勵是非先鋒仕度存慮に有之候付薩長二藩之兵代りに先被差出置候様にと奉存候可然御義に候は、今十三日中御沙汰可被下候事

二六二 滋野井光壽書翰〔楫取素彦宛〕 明治元年正月二十日

愈御無事珍重存候然は今度東征之義蒙御内命出張候處義徒日々走著候得共未小人数仍而人数走著候様ねかひ候尙巨細之儀は堀尾直人可被聞届候事

正月廿日

公花押

小田原文助殿

二六三 山田顯義等書翰〔楫取素彦・品川彌二郎宛〕 明治元年正月二十日

引續御盡力奉察候爰元も爾後別義無御座候後陣昨夜阪著いたし候に付爰元交代追々京師に引揚候間早々河原街陣屋御仕向可被下候明晩夜船にて二中隊引揚申餘は順々引揚申候間左様御承知可被下候十一中隊迄有之申候い細は明日片野上京可申述候其中飛札を以申上置候勿々頓首

正月廿日

木戸氏も昨夜爰元著に相成申候明日片野一同上京にて御座候兵糧拂底に御座候は、爰元可上せ可申何分可被仰越候以上

山田市之允

楫取素彦様

佐々木次郎四郎

品川彌二郎様

編者曰本書ハ佐々木次郎四郎筆也

楫取家文書第一 (明治元年正月)

二六四 杉孫七郎書翰〔楳取素彦宛〕 明治元年正月廿四日

御安康被成御盡力奉大賀候 小生共碌々罷在候御休意奉希候上國之御様子
小幡罷歸概略承知仕候第五大隊は已に豫州へ渡海仕候委曲は伊勢氏爲其
罷登候間御承知可被成候爰元一手は上國之事大迂濶高田春氏過る八日尾
道に罷歸候後始る新藤次并御飛脚金作今日着候位に何も相分不申込り
入候草々拜首

正月廿四日

尙々今日御手昏拜閱仕候兵隊一大隊銳武差登せ候付其餘四國方直様登
せ可申候醫者李家一建今日より罷登申候以上
石部兄へよろしく中手子手子等も罷登申候と御噂頼上候
寺内へ可然御致聲奉希候

杉 孫七郎

楳取素彦様

拜復

二六五 世良修藏書翰〔楳取・國貞・大村宛〕 明治元年三月四日

一筆致啓達候然は第四一中隊其外奥羽出張被仰付候所小荷駄方之儀は強
ろ不被付越様相見候處左候ろは此往自然差間之儀出來も難計に付是非被
付越候様御沙汰被成急速當地迄被差出候様奉存候右爲其如此御座候已上

三月四日

世 良 修 藏

楳取素彦様

國貞直人様

大村益次郎様

二六六 玉乃世履書翰「楳取素彦宛」 明治元年三月廿六日

一翰敬呈仕候暖和之節に御坐候處愈御壯健可被成御勤と奉賀候舊冬來は形勢大變革に相成遂に
國家御正義御貫徹に立至り恐悅至極に奉存上候就るは不相替御勤勞被遊候段爲

國家奉欣并候就るは不假初弊邑之者御引廻し被成下何共御禮申上候様無御座奉存候然る此度有福新輔御地罷出居候處新輔の岩下經濟懸り之者山蠶養法拜借仕度候段 先生の申上吳候様に頼置候様子に御座候小生此内又養法之事 先生の願上置候義傳聞仕り小生も御頼申上吳候様屬托を受候義に御座候間御多事申上兼候義に御座候得共新輔の拜借被仰付被下候得は難有奉存候右御冀申上度夫耳奉得貴意候餘は拜謁之節も可有御座萬々申上殘候恐惶頓首

三月念六

玉乃東平

花押

楳取先生

執事下

尙以久保氏昨日弊邑御立寄に舊臘來之高話拜聽實に面白事に御坐候皇國文明に趣き候段事々耳目を驚し候事耳夢と計に奉存候以上

二六七 尖戸璣書翰「楳取素彦宛」 明治元年四月五日

去月念四之御書東到來薰手奉拜披候先以御清適御歸山被爲在候御様子奉恭祝候去冬已來不一形御盡力之段幾重にも御苦勞之段奉恭察候
世子様にも議定御職被蒙 仰候御様子追々御辭讓も徹上仕兼候御事柄可有之別して御苦案奉察候就るは御話をも相伺度候へとも只今に徳山表中々引取候譯にも参り兼いつ比歸山相成候も難計いつれ來月中旬比には更衣旁一先御暇相願度合居候事に御座候宮津侍從之事被仰越此も御對晤

相伺度筒入之一品御贈り被下慥に落手忝奉謝候久振御歸山候へは何卒緩々御滞留被成度いづれ又々御上京にも相成可申候間いつ比御上りに相成候哉旁御しらせ被下候様奉願候頓首拜復

四月五日

尙々時下御自齋奉千祈候瓢子申立之儀はいかゝ相運候哉旁御聞せ奉希上候以上

備後助

拜復

素彦様

二六八 赤川又太郎書翰「楳取素彦宛」 明治元年四月十四日

漸々雨間に相成候處尊候御佳適被成御起居奉賀候小生一昨夜華浦を歸山仕候得とも宿痾今以不得全快變屈罷在申候

鷹壬兩公達明日晴天思召次第雨中にても於小生差聞無御座候ならは拙寓御供被成下候如何哉此節は躑躅花盛

開山中光景尤妙にて御座候大津醉翁御同伴可然將又御待遇凡如何様に仕候可然哉小生方唯厨婢壹員のみにて何も不相調御給仕等之事如何可仕哉萬一御來願被爲遊候事に候は、夫等之事も略被仰越候は、仕合可申候今日城中罷出度候處宿痾も有之巧者塗壁何角取紛乍失敬以書中奉内談候御急答被成下度奉願上候它是拜青萬縷可申上候勿々頓首

四月十四日

又太郎

耕堂先生

文几左空

二六九 楳取素彦上書 明治二年正月

春御書付を以被

仰聞之趣も有之嚴重御引立被仰付追々成立之目途も相見候所先般

朝廷御一新之折柄人才教育尤急務之儀に付御詮義之上文學兵學步騎砲三
兵迄三科に分ち凡八歳ハ拾六歳迄素讀手習算術等小學舎其外に修業拾
七歳ハ第一科歩兵一期之修行被仰付卒業之上執政參政其外役々被差出其
科之教授方立會御試之上學校之印鑑を以登科被仰付尤未熟に而登科不相
成者は引續三ヶ月第二科三科に到り候は壹ヶ季其科之修業せしめ重
御試み仰付候に付且御家頼中本人嫡子庶子共根之階級に不拘三等に被相
立三科之卒業不相調者を下等にし三科之卒業を終る者を中等とす中等一
般隔年

御直試被仰付拔群卓越之者を上等とし其身一代進級被仰付

御免狀頂戴被仰付候事

一御試仕法

第一科歩兵

但歩兵運動ハ司令官に到迄を以下ハ一期之修業と定め成業一年を限と
す成業之者は第二科に移る

第二科文學

但三年を期限とす餘暇を以劍槍兼業すへし一期之修業試験之上第三科
に移る

第三科兵學

但三年を期限とす騎砲專業之者は各其塾に入り學業共に研究すへし
右御試之儀は各科一限相濟候者教授方より學校主事ハ名前申出之上日を
刻し御試被仰付當日出席之役員左之通

執 政

參 政

軍政主事學校主事

大 監 察

監察

- 一 登科之面々附立を以て 御聞執政之印章を以て登科被仰付候事
- 一 三科不殘卒業士官中等入之者たりとも員外にして三科之内心懸次第其塾々に入込被差免候事
- 一 拾八歳迄に第一科卒業不相調ものは本人は知行之内御預り嫡子は廢嫡庶子は他家相續被差留候事
- 一 廿五歳に至り第二科迄卒業登科之者先下等士官之御手形被下置候事
- 一 陪臣以下之者たり共三科之内拔群上達之者は於于時御試之上御仕方之詮儀可被仰付候事
- 一 第一科修業仕度者は小學舎教授方其外ハ明倫官ハ申出御聞届之上入塾被仰付候事
- 一 試業之儀當年ハ期限を差立毎年御試被仰付十ヶ年已後諸役員三科之業を經さるものは一切御仕方不被仰付候事

一 右年限中は不得止貳拾五才以上壯年之内文武修業各一器成就せしめ候者撰舉諸役員替被仰付置追々御登用被仰付候事

右之通被仰付三科共入込生員に限らず外來生たりとも御試被仰付候條不懈罷出可令修業候事

明治二年巳の正月

○黄切紙

嫡子庶子肩書

何條 何 某

學校印

右第一科之修業被差免入塾被仰付候事

年號 月日

○同

嫡子庶子肩書

何條 何 某

學校印

右第二科之修業被 仰付候事

年號 月日

白廣折二ツ折

嫡子庶子肩書

政事堂印

何條 何某

右中等入被 仰付候事

年號 月日

白小奉書二ツ折

嫡子庶子肩書

御印

何條 何某

右上等入申付候

年號 月日

右巳の正月廿日監察方於政事堂に寫取候分

文學寮

諸生中

右此度御試み御仕法被仰出候處是迄入込之面々一期之修行御試相濟み候上歩兵未塾之者第一科に移り夫々第三科に轉し候様被仰付候事
但歩兵三期之修業相濟居候者は直様第三科に移り候様被仰付候事

兵學寮并騎砲塾

諸生中

右同斷歩兵文學共未熟之もの第一科に移り夫より第二科に轉し候様被仰付候事
但同斷相濟居候ものは直様第二科に移り候様被仰付候事

一前條入込諸生之内專業之餘暇を以未熟之藝兼修せしめ御試を請度者は

- 兼名前付立學校主事の申出置候様被仰付候事
- 一御試之儀は當巳の歳より期限被差立候事
- 一諸塾役員之内司典廟司舎長等は御試被仰付候事
- 一是迄入込之面々に其科々に當り修業被差免候段主事を剪紙相渡置候様被仰付候事

覺

- 一毎朝六ツ時を五ツ時迄素讀之事
- 一同五ツ時を九ツ半時迄手習之事
- 一夕八ツ時を七ツ時迄日割にして習讀輪講算學之事
- 一稽古場は不及申往來共無用之雜話非禮之行作無之様可被相慎候事
- 一諸士中凡八歳を十六歳迄本人嫡子庶子を不分罷出可有稽古候事
- 一依願入込被差免之面々校門出入等惣諸塾一統之規則無相違候事

一小學之大意は素讀手習算學に志し師匠之教諭を承諾事行規能成立肝要之事に候條幼年より心懸可有出精候事
右之通被仰付候條宜被相守候事

明治二年正月

二七〇 加藤有隣上書

明治二年三月四日

極密言上

一乍恐去秋

御東幸

景行天皇様已來之御盛舉億兆奉仰旱雨之沛澤候得共其砌 勢廟御鳥居自ら打倒れ候杯乍恐 神慮如何と奉恐惧候尙又今般再度之御東行 廟謨深遠本より微賤之奉臆測可申上儀には無御座候得共外内御多事上下疲弊之砌旁何共恐悚戰兢之至奉存候恐入候儀には御座候得

共可相成儀に被爲在候は、

勢廟迄にて 御回轅被爲遊候は、御萬全と奉存候

一 關東は急に 御名代にて暫御攝政乍恐

親王方様御一人に尾老公杯御附屬被爲在候は、可然奉存候

一 京中は長藩加藩等にて御守備大坂城は暫時薩侯等々府朝の大吏公卿方

等と一同御取締被爲 仰付候は、何れも人心追々折合可申奉存候尤海

軍局被爲創置候は、淀城に

兵部卿宮様暫御客留にて御會議被爲在 候は、可然奉存候

一 外に三百諸藩の中にも態々抽て彥根候

御前驅と申す儀如何にも去春已來悔悟諸藩に抽て勤 王に相變し候得

共徳川氏四天王第一の家柄にて實以て可感賞次第にも無之且兼ては尤

先帝様 御宸怒に被爲觸候儀櫻田等の神誅は天下億兆の快笑罷在候次

第如何にも海内の民望に關係仕候事には有之間敷哉と奉恐懼候

一 郡縣可然は紀州を別て抽て建白仕候由右藩は一昨年比迄は専ら徳川氏

の股肱にて已に江戸表にては歳寒後凋の喩を引き衰暮を回復可致且又

如何様の 朝命ありとも誓つて 朝覲等は致す間鋪の由譜代列藩等へ

傳檄致候處當今津田某等は已に辨事局へ被召加罷在候處迎も難被行郡

縣論等を主張し竊かに 朝政を愚弄し奉る儀可疾の反覆是全く洋俗を

主として王政を紛擾し奉るの苦策と奉存候實以て右様下説の通りに御

坐候は、先紀州藩一國丈試に志願の通り郡縣創典被 仰付其君臣子民

の所置仕法完く取調差上候様被 仰付候は、可然奉存候

一 暫時東京は一親王様方に土州附屬御委任被爲在大坂は薩藩へ御委任被

爲在候は、乍恐垂拱揖讓して天下治安に相歸し可申其他は積年の疲弊

黎民の塗炭を扶循し在國各自に専富國強兵以て他日外征内守非常の

御用を相待申上候様被 仰付候は、天下大同の御大本次第に御整立被

爲在候事と奉愚案候

右六則至急の御大綱かと奉存候間條列奉密疏候尙又乍恐細目委曲の儀は追々取調可奉申上候誠恐百拜

己巳重三後一日

漢學所小吏

加藤有隣

追加

一方今天下新に治り億兆較方向を辨候御時運に至り六龍輕易に御舉動又は土木之功を興し莫大之御散財被爲在候亦は實以て國家疲弊之第一に亦乍恐此後非常之變難到來之折に至り必ず御手を被爲束候御事と奉存候第一萬民之瘡痍を醫し塗炭焚溺の苦みを御取救御實德沛然たらしめ先御根本百官府初も少し御基礎確乎被爲在候御上にも御新典被爲舉候は、可然奉存候

二七一 西山堯民筆探聞書

明治三年二月八日

探索書

長防一件

- 一長州騎兵隊議論異同より起り五六千人有之隊長松原音藏奮發
 - 一井上民部大丞長州表に罷越居候處大事件を察し俄に山口表を脱し正月廿六日坂地の著同廿七日歸京翌廿八日拂曉東京に發足之由
 - 一河田左久馬去る廿九日夜浪華に出立
 - 一正月十九日浪華兵部省に兵隊繰出蒸氣船に下之關へ着し候積り
- 右動搖之事件確定之趣承り候儘申進候

二月三日

長防内亂聞書

楳取家文書第一 (明治三年二月)

- 一 昨廿六日井上民部大丞長州に歸藩す曰長防兩國奇兵隊に石鎖國し要所口々關門を設け井上出國大に困難漸く一道を待て上坂すと
- 一 右鎖國場は攘夷を唱へ實は私怨之由既に山口萩井末藩各別通路を遮斷し石州を説入候由
- 一 石州濱田縣大森縣に移す知事始行方知れず津和野説諭同藩力を計り表に同意す
- 一 逆勢二千人計是は馬關攘夷を始北越奥羽之戰を遂し功者の士と云
- 一 奇兵隊中隊長役官は山口政府の論を是として二百人計り奇隊を出して山口に隨從す依て奇隊純粹の兵士のみ逆煙を揚たる由當今奇兵隊巨魁松原音藏と云人の由此人政府關係之人論により幽閉せられし人此度逆勢に與し同じ閉幽家を引卒す
- 一 右奇兵隊農兵を頻に徒に入らしむ其策別人をして百姓一揆を催さしめ其一揆奇兵出張説得米錢を與へ是を徒に引入れ候よし

- 一 廢寺之説を大に唱へ僧徒を引入候由不日五六千に至るべしと云
- 一 知事公始末藩知事一同より直に説諭あれとも更に聞入れず知事公は山口に擁繞され君側は弱兵のみの由名士は木戸君側に在しよし
- 一 彈藥糧米多くは逆勢にありと糧米は積登り新穀不殘引取りし由政府に
あるは軍艦のみとあるば彼れ乘を得ざるゆへなりと
- 一 逆徒之氣脈京阪東京共に通達しありしと當地にも間者多人數入込たりしと
- 一 右に付井上は一昨日着京攝間同國兵士を集め兵部省の兵隊を請ひ借り軍艦にのせ馬關に向ふと井上は昨夜出立東京に飛行す京攝の間得し藩士貳百人兵部省より得しは八百人なりと云學校にありし同藩五人は井上の命を受け急き暇を告げ下宿す井上は東京へ行き甲鐵艦を拜借し同人のりて三田尻を攻る積りの由
- 一 當地に得し兵士不殘明廿九日軍艦に乗馬關へ行き長府城に入り合力出

戦之積り多分來月三日四日の内戦はんと學校出立の書生等奮發す
一奇兵隊何國何處に同黨あるを不知既に肥後國に説得に行しが彼の藩に
縛せられ説諭事ならずと云

一松原音藏佐々木正一富永有隣以上三人巨魁之由右は長藩を直に聞し儘
前後となく書記すものなり實に天下人心不居合攘夷と云封建と云郡縣
と云賈金あり楮幣あり米價沸騰と云紛々紜々たる時柄萬一鎮機を失せ
ば如何なる御國難に至るならん誠に愚慮に堪へず恐縮仕候

庚午正月念八夜

一右は高松藩香川精一郎洋學校に在勤同校ある長藩人より聞取の趣爲知
越候由に同藩彦坂小四郎大久保來兩人昨夜直に私御小屋に罷越見せ
吳候由聞取候事に御座候尤昨夜外席に福岡藩中村章より承り候趣も
大體同様に御坐候得共如此不審是も同藩人洋學校に修學致し居候人同
校中之長藩人より承り候との事右に付同校同學の長藩人は不殘一昨廿

七日夜蒸氣艦にて歸藩いたし候由申居候事

一久留米藩官脚本月廿一日頃黒崎より乗船之者之咄に小倉に百姓一揆甚
敷同所放火致し候を目撃し來り候由御同藩雨森傳左衛門昨夜前條福岡
藩中村章之咄に付て咄し候事
右之段御達仕候以上

正月廿九日

熊本藩

猪俣才八

○
舊冬十二月中旬頃長防動亂事件に付藩用も有之探索旁豊浦藩權大參事
山口の罷越候處知事公方直に説諭に相成鎮定に相成候趣其後百姓一揆
は少し有之候由小倉一揆と申は國難之節長州へ被奪候喜久郡に一揆
差起り長州の人数繰出に相成早速鎮定之由右喜久郡は當時日田縣管轄

相成居候得共其節は長州之手切れ居不申役人も出張致し居候に付長州
人数も繰出之事に有之事に有之趣き

正月十八日小倉表出立京着致候

小倉藩

深野敬藏

咄之由同藩鮎川篤太郎承る

京師

西山堯民

午二月八日

探索傳寫

二七二 楫取素彦上書

文久元年四月 (編者曰本書ノ順次ヲ誤レリ)

覺

義興碑文之儀は

豊元公以來御手繼

興元公御加冠御契約彼是雙方御因柄有之事に付碑文建調被仰付候意を主
本と仕文作可致哉但は義興儀は大内家世代中にも別段に傑出仕天下に
も稱譽有之候人物に而當時忠臣孝子其外偉跡有之者勸奨之爲事跡旌表被
仰付候儀に候得は義興鴻勳偉績湮滅不仕候との意を主とし御當家御因柄
之儀は含蓄仕撰文可仕候哉愚案には御因柄を主と仕撰文被仰付候は、義
隆儀は義興より御親近く且嚴島御一戦も全義隆御弔軍に而從是御當家御
義戦之名天下後世に致炫曜候事に候得は御因柄を述候節は第一大寧寺義
隆墳墓御手入相成候上義興墳墓に御推及有之儀共には無之哉因之中尾村
碑文之儀は義興一生鴻勳偉績撰文仕可然哉に奉存候此段御差圖奉願候以
上

四月

二七三 加藤有隣書翰〔楳取素彦宛〕 明治三年八月二十日

楳取素彦様

加島有隣

幸便略啓仕候其後打斷御無音打過候處當夏は珍敷盛炎に而兎角困極尙又秋來殘炎甚敷御坐候處先以 御一同様愈御清適奉恐賀候扱私共も中元後を瘡疾に而于今疲勞永々相引罷在候處昨今初而新涼快方之仕合旁甚曠絶疎懶多罪御憫察可被下候其後打續御平穩之由恐悦不過之扱森寛君も此節は山口表へ歸住之由過日一寸來書之處右に未た不及返書御序も被爲在候は、乍憚宜敷奉願上候尤東西共別之事も無之只々御承知之通り紛然たる事に御座候且朝鮮清朝并に普佛構戰等之仕未定而御承知とは奉存候へ共是又未た確報も無之候て隔靴之憂勞のみに而御坐候尙委細は後便申上先は今日久々に而出學旁不遑縷述何も急便に差掛り草略如此御座候餘は期重鴻之時候恐々頓首拜

八月廿日

尙々時下折角御自愛專一奉存候乍末御家内様方宜敷且又當節は 完
松岡儀兼、小幡諸賢契様中如何被爲在候や暫御消息も不相伺何共懼入候得共御序次第右書中萬々宜敷様御致意是祈候何も病毫不能一々餘付後音候再拜

二七四 近藤甲一郎書翰〔楳取素彦宛〕 明治四年五月七日

御清適御奉職奉恐賀候私義漸先月廿五日東著仕候兼而被命候御書籍類大坂より差送り申候相達候哉其節留主へ之おくも物御願申上御厄害之義恐入奉存候此度鎌倉打御下緒差送り申候御落掌可被成遣候扱亦荒瀬善六が相頼候神輿凡

鳳輦葱花輦に據り候形にて積らせ候處彼方より兼て申候員數よりは大分高價に當り候故一應右圖面尙積り書等其儘差送りと存申候實はこれを手

始にて追々諸社へも及び候様有之度就ては只一基之事に付精々金物其外
 法則に叶ひ候様仕度其段申越候間御序之節尊臺よりも御説諭被仰付度奉
 願上候時に今般諸神社并社人之御規則大變革既に近々可被仰出之由先神
 社は官幣官社大中小區國幣官社大中小有之官幣官社は神祇官祭所國幣自餘府は
 府社藩は藩社縣は縣社所謂府藩縣側近崇敬郷社等也郷邑産土防長にては長府
 一ノ宮國幣中社防府一ノ宮國幣小社此餘式内出雲神社劍神社は期年精覈を経て更に
 官社に列せらるへしとの事其外萩春日楨山口大神宮宮市天滿宮等の如き
 はいづれも藩社諸在産土の社は皆郷社なるへし神官職員大社は宮司權官少
 宮司權官權禰宜主典中社は宮司權官權宮司權官禰宜權禰宜主典小社は宮司權官禰
 宜權官定員各區別有之應社所謂府藩縣社なり郷社に至りては只祠官祠掌之二號職員
社に因て多寡あるべしのみ然亦官幣社大宮司は華族士族之内を以任撰國幣社宮司は府
 藩縣大少參事兼任或は華族士族新任も有るへく若又從前の神職其任に堪
 ざる者あらば假令神孫嫡々の本流といへとも不殘一旦は世襲の職を解き

改補新任たるへく況や職任に堪ず一社に就て冗員たるもの凡て廢任との
 事尙委布は小幡彦七まで申越候まことに固有之神職浮沈存亡之際荒瀬佐
 甲其外へ御序之節豫御致意奉頼上候餘は后音へ譲り置申候其内御自重奉
 專禱候草々頓首

五月七日

近藤 甲 一 郎

尙々御歸省之節は御家内様方へ可然様被仰上度奉希候已上

楫取素彦様

座下

二七五 楫取素彦上書年代不詳

講堂御書附に就疑惑を生可申哉に奉存候當節於明倫官制度科之諸生并に
 外壹兩人も被相添候而大八洲之歌とか申集撰定被仰付候御様子此儀も彌
 御思召有之於明倫官撰定被仰付候は、幸近藤晋一郎其道に長し候事故早

速被呼返右撰定總裁にも被仰付候得は此一舉も御實意に叶可申左も無之諸生内にも撰定仕候共取舍之間不行届も可有之他日大成之上も大方に推出し是祐

藩侯之思召より出候大著述とも難被申は必然に奉存候元來入學之諸生は經學を本とし歴史を以識力を長養せしめ其餘經濟有用之道に涉り候社諸生之本分に可有之然處學校制度科に乍罷居

天朝に於今日被行候御次第府朝之式日及御國之御制度も吟味は不仕候而荒鴻之事蹟へ眼を曝し候儀諸生有用之學問とも可申哉何事も下情君邊へ徹底不仕候を於下には是等之儀も御思召と存

御上にはケ様之儀一圓不被聞召候に付壅蔽之内上下相疑候儀に相成り遂には君上御失徳を奉備候様に可立到哉に奉存候古人も學問政事一體之儀追々議論も仕候得共憚乍當今之勢

君邊學内さへ御一體に不相成事多く有之往先學中御政事御一體に相歸し

人才成立候御目途も無覺束奉存候扱又當春祭酒をも御組替に於飯田左門被差出候得共全體學頭之權柄は別人之手に御座候故却而學頭も御用懸都講に被打卷學頭之志は被行不申倒行逆旋とも可申哉に奉存候態と左門儀平士より學頭役へ被差出候は、一先心力を竭所存通に取扱候様御委任被成候社新規被差出候御甲斐も可有之然處左門儀虚位を擁し學頭之名目を計相勤意見之程悉御信用も無之依之諸生崇信も手薄く威令も行届兼自然と師道も不相立氣毒に奉存候何卒能々學内之事體御聞糺有之往先學内君邊御一體に相成り御思召筋致徹底壅蔽之儀無之正學御信用之旨今以御相違無之段末々迄感孚仕候様幾重も御吟味被仰付度奉存候已上

七月

小田村伊之助

二七六 日下部伊三治妻書翰〔久阪義助宛〕

年代不詳

御手紙被下難有拜見申上候仰之通りきひしき御あつさ御座候へ共彌々御
機嫌よく入らせられ萬々御怡申上り候今日はめつらしき御品わさ
御持せ頂戴被仰付千萬難有厚御禮申上候三圓方之御手紙儘に御受
取申上候只今るす中御座候間歸り次第早速遣し可申候間左様思召可被下
候まづは右御禮且御返事あらしく申上候めて度候

七月二日

尙々くはしくは御出之せつ申承り度とそんし何も御禮迄
と早々以上

西むり 出損

日下部君

御返事

二七七 日下部伊三治妻書翰 [久阪義助宛] 年代不詳

一此狀物恐ながら二羽様は御とゞけ被下候様御願申上候何分御氣之毒様
とよろしき様御取計暮も御願申上候尙悉しくは町田氏申上候間
左様御聞被下候かし當用迄に何も申残し候以上めて度候

十三日

尙々御都合次第御出被下候様御願申候早々以上

日下部

久坂君

用事

二七八 日下部伊三治妻書翰 [久阪義助宛] 年代不詳

一此たばこは先日供に参り候老人喜平次を恐ながら進上致し度段承り候
間御覽に入り候何とそあしからす御汲取御納被下度萬々御願申上候
以上

二七九 穴戸磯書翰「榊取素彦宛」 年代不詳

□^{蝕虫} □^{蝕虫} □^{蝕虫} □^{蝕虫} 十箇拜 □^{蝕虫} □^{蝕虫} 感佩之至入浴中に御答も只様遅延に相成御寛恕奉願候御贈物に付愚考候處甚嘉兆に御座候右之通

水餅 十

水は坎なり坎卦を重驗とす今水を出るは即重驗を出抜る意にて易のいはゆる心亨と申場にて至誠感孚之象なり已に水を出る又將就火には離とす離は明なり公明正大天下に照臨するなり且白餅城持國音相通す一國一城之制なれば一餅は一國に當る十餅は十州に當る餅の字は并食なりされは十州を并食する象なり
先公御創業之地にして此嘉兆を得るは即ち今日之事至誠感孚十州快復之兆たる疑べからず

左ア、御初穂貳十四銅置て行かつしやれ

どなた様にあも手相人相御身の上運氣之吉凶纔か貳十四銅にて委しく申上る思召有之御方左の手を被差出筮竹ガチャ、

十四日

諸先生看此書了。想當哄笑一時絶倒不止。僕早已呵々大笑矣。

南 隣 生

北 隣 先 生

拜復

二八〇 飯田忠彦歌「筆者不詳」 年代不詳

網乗ものにて東に下る道中白須賀元日に 源 忠彦

うたへとも夢とも我は老らぬりよ春來よなりせいふは誠り

赦免相成り都のかたに歸るときに

榊取家文書第一 (年代不詳)

おもひ來やきへふんとせし露の身をぬさへひ草よかえをるしとは
右手紙之内に有之に付序文は覺不申其他存覺不申候以上

二八一 寺島忠三郎筆長歌

年代不詳

千早振神世のむかし神くの鎮め玉閉る秋つ島實にも尊き日の本の清き
光は古も今も千年も萬年も末のまつ山のすへ掛てかわらぬ君か御代なる
をかくとはいさや白浪のよせ來る毎に異國のことうき船の狄人らかあら
ぬねぎ事つどくをかけ引國の心とや御國のものはみなからまめく敷
も思ほえすまとふころにぬば玉の黒き間部をかたらひて世に類なきみ
いさをはさわにあれともあやまちは露もおわさす聖なる賢き君を退氣て
小金眞玉を春山の華ちるかごとまき散らし晴るゝ雲井を曇する巧のほと
の淺猿と浮世の人の言の葉に聞も苦鋪老の身は五十四つになりぬれと七
十三の老の母朝夕さらすつかへつゝ離れてふ事を嬉敷もともにころを

此處は必ず誤なるべし

添られてわか國の爲君の爲後れなとりぞおふしくも老の言葉を力草露も
含むる朝ほらけ日も立昇る衣手の常陸の國を立出て志璣島の道ある御世
を慕ひつゝ往も還るも梓弓春けき道を笹蟹のいともたゆます引添て雲の
上まてかけ橋を渡る思は天さかる鄙に生れし塵の身のちり積るてふ山の
井の深き心の源は流れて清き丸水の中にすみぬる魚心賤き身をも忘れつ
ゝ御國の爲と朝夕に心はちんに碎けとも只一筋に行水の蟬の小河に菘
してはるふきぬる旅衣曉告る鶯の野末に匂ふ梅か香を風の便に久方の
天つ空にそ聞揚げゆゝしけれども九重の雲井の神に上るなり
少々間違も可有之候得共年來我黨の記誦は大形如此かの様に候此上は
別人に御質可被下左すれば又々正を得る事もあるへし

反歌

志璣島の道たとる身を笹蟹の雲井の庭よひかれ來よけり
此處は必ず間違なるべし
あせ道よゝるさゝしきとしたては人涉るとも我はわをらじ

曇りなき清^赤き心の眞鏡清き光夜四方に輝け
玉銚の道は荒れて進み行大和心の駒はたゆまじ

二八二 野村望東歌 年代不詳

山水とゝもみすみおわらむしろしきてもきてもふれ望とおきはむ

望 東

山水とゝもに^{み脱カ}すおはわらむしろしきてもきもたる身お望々り

望 東

二八三 野村望東歌 年代不詳

このころなにはわたりこと舟をよこせてかの御城にさへ忍みしらま
ありつとひつゝいみじき事をおほかりけるよしをききて
みおと川清きおかれもなつむらん忍ミのしりらきりけてみこせは

二八四 野村望東歌 慶應三年九月

九月のすゑつかた

小田むらのうしのおもき御やくをかうふり給ひてたゝならぬ御旅にい
て給ふをおくりまゐらす時に

望 東

いつしりとわる待わひしま取つる此こゑをくもぬよあくは時きぬ
みよのさめいくささちするものゝふよこゝろそありはおくれやはする
かたくの國々とゝもに物し給ふ時のいたれるにわか筑紫のさもなくて
よろゝしきかいみしかりければ
紅葉れ大うち山よてりみちてこゝろはくしもそめよとそおもふ

遺稿 楳取素彦

元治甲子の冬投獄の折たま／＼雪といふ題にて
むら宿の軒よしけれる吳竹も夕の雪よふしやむらむ

獄中の元日乙丑のとし

かき罪を知る人あらは我もまた春の恵よ逢はさらめやは

雪の下てふあつものを贈りし人あれは

消やらぬ雪の下よりもえ初むる若菜も春を待つよやあるらん

春雨

春雨は家よあるたよ淋しきをぬれてうき身の 淋むひしも

二月十五日の朝出獄のおほせあれは

おもひきやきゆそかりなる露の身のふたゝひ御代の春に逢はんと

遺稿

四百四十七

五月九日ひろ島の宿を出るとき

さみされよ残る花さへくちもて、それとも見えぬ大和撫子

述懐

斧の上鼎の底もいともしよあゝろよ耻ることしかければ

五月二十日東軍の打入りぬとき

掃ふへきそのまゝ草はよそよして同根刈るもあさましの世や

古道照顔色

みよし野の峯の白雪ぬみまけて間近く見つる山さくら花

六月二日おもふことありて

すきまなき板のかみひのかけ金の思ひはつせる時もあらむ

萩

ちきりおきし人の心は白露の色つき初る萩の上かか

豊前ある添田村にておもひを述ふる丁卯二月

花はたゝ何心かく春めきてあそれ添田を知らす顔ある

船越氏か出羽の國に軍たちするを送るとて

くさまくら秋田のさとのきりくは虫さへ仇をさせと鳴くらむ

曉歸雁

滋賀の浦やおほろ月夜よほくかれて曉歸るかりを見しかか

丁卯の冬都へたちして西宮にやとりしをり

戌士のかりねのやとの寒きる取八幡は雪けあるらむ

師走十日の夜禁中にて

夜もすから庭火の烟たえくはに衛士の衣も霜やおくらむ

望東尼をいたみて

時雨する佐渡の浦へのかれ尾花たれをまねきて袖ぬらすらむ

相模の任にありし時村めぐりして津久井の郡にゆけるをり

土あけし草やのむ糸よ夏の來て高くも咲けるいちもつの花

壬申の秋大住郡をめぐれる時

うちしめり鳴の羽おとそきあゆかる澁澤あたりしくれふるらん

明治六年八月のはしめ天皇皇后兩陛下箱根宮の下の温泉にみゆき
し給へるとき小田原の驛に御車とゝめさせ給ひてこよろきの磯に
網ひかせたまひければ

和田つみの神もみゆきを待ちつらむ荒波もあしこよろきれいそ

足柄山の麓にて

みちのくればえたちのあありあと問へは風そまらふる笛塚の松

長澤某の山莊にて

いつか我世のさあしきを忘れもてまゝ焚く宿に身をおきてまし

伊香保村にて

あゝかゝ温泉のけふりうちかほみ此里そかり冬あありや

豊榮神社奉納の歌に春雨といふを

草も木も色あらたまる春雨よつく／＼ふりしよをしのふかあ

閑中燈

よ泣うしとあきらめし望し燈火はかけより外に友はあらしあ

あかき山をこえし時

狩人のしをりつたひよおく山のぬす猪は床もふまむてみつ

廣瀬中佐をよめる

海ゆかは水つく屍と言たてしそのことをふめる君か取

湯野のやとりにて

ふりつゝく雨は堤の水こえて野路よよとめる山吹のそあ

橘

見る庭のそあたちはあのかかりよて聞のふすまもかほる夜はか取

女郎花

老るみもいとそてあひく女郎花むかし契りし色からあくに

寒夜燈

おもひ出る老せぬむゐしともし火の凍るよすから文よみし世を

三條内府の賜はりし鉢うへの梅咲きぬれは

咲きそめし梅に昔をしのふかを君をかゝみの花とおもへは

立春の日よめる

遠山はゆきけの雲とありよ鳧春さつ空やいつあゐるらむ

殘暑

秋きてもおほふく風そあつかしきいつまで残るあつさゐるらむ

上杉謙信

筑摩川おまをひそめてすゝみしも太刀の光そかくれさりなる

夢

世の中は物のことくゆめありとゆめれうちよもかあちけるか歌

中山三_七 尼か手向の歌に寄水懷舊といふ題にて

ゆく水のひきかへすへきみちあらは君とまゝ見むもち月の影

玉祖神社の献詠に月前虫といふを

照る月よ神のみまへをあくさめて柳の枝よ鈴むしのあく

筆人の心をうつす

まのほさりりさらひり糸しおとの葉も筆よ心をうつし々るか歌

窓の月

ほそめにも窓をはあけて月を見むかゝ山里の風あらし夜よ

源義經

世よえるきいきをゐる身もおもひきや蝦夷のえほ瀬にうた_七 かるとは

梅告春近

おほさりよ裁にし梅花さきて春をは告くる唇とそあふ

伊勢神宮

みやしろの千木のかゝ曾木いや高く神の稜威の仰かるゝか歌

遺稿

池濱公園記念岩に題して

動きかた御代のためしと千早ふる神のたぐれるいはれあるらむ

硯の水の凍れるをみて

今朝もまた硯の水の凍りなり火桶をいそげ文机のそは

玉

伊勢の海ちひろの底はほそひおそ玉をいたきて世よひそみけれ

神樂

大内の神あそひよやあらひなれ里の神樂の朝くらの聲

歳旦

あゝそちよほまる六とせのもしめとて身のさひはひを祝ふふかあ

秋興

里人は初穂をあへてうふすあは神の祭のさかみつさせ

雲

夏の友の月のむしろもちかつきぬこのうき雲のかゝらすもかあ

夏月

夕立に晝の暑はあかれけんすゝしくすめる水の上れ月

姉小路公知卿に贈位の宣下ありしとき

あら鷹の荒振人の焼太刀に身はたふれしも名あそ朽せぬ

國體

とつ國にためしあらめや千早ふる神の世つきのたぐきませるは

月照雪

あろかねをほさむくそかり積む雪に月さへさゆる村のをそみち

新年松

としのたつ今朝はちとせをよそひてそ老木は松に雪のつもれる

家庭教育

身をすてゝ國につくせる人の子も親のいさめよそたつかりけ

遺稿

大狩坂

斜陽射海閃金波，目送輕鷗掠島過。數里山程行不盡，松根駐杖聽漁歌。

發須佐赴江崎

笠檐無影晝濛然，春雨滿村細似烟。一帶松林梢將盡，西堂寺下水連天。

雪日臥病賦此遣悶

庭柯不動影琅々，閑護暮寒憑土牀。新政曾無包地勢，且忻風雪滅遺蝗。

附家信

室無僮石士之常，未望餘貲滿囊爲助啼。寒叫飢苦腰纏一半寄家鄉。

洞春公忌日十絕之一

干戈落々暗塵迷，海內何邊不鼓鼙。莫說春秋無義戰，嚴洲風雨斃長鯨。

杉田村見梅

海灣山腹幾新畬，栽得梅花密又疎。未有吟人築書屋，春風徒屬野僧居。

大井驛志喜

溪復峯重路幾彎，人家多住峽雲間。今朝稍盡十三驛，馬背初看濃尾山。

待渡

水面無風萬象激，鐘樓倒影々層々。顏山近聳笠檐上，一簇浮風氣尙凝。

瓶梅十絕之一

百卉蕭々萎朔風，滿城寒雪歲將終。窮陰苦節與誰守，獨有梅花心事同。

上巳日吾公賜章服依前韻志感

偷安何必事輕肥，曾把一經期格非。迂性猶無涓滴報，愧頒恩賜及春衣。

壬戌首有坂下之舉志所感

腰刀三尺髮衝冠，春淺大城濠水寒。上巳上元均義舉，擣虛偏易伐謀難。

宮柳

春風搖曳弄輕柔，萬縷垂々掩御溝。不似河橋折殘樹，年々憔悴惹離愁。

壬戌春盡日保岡小川二子來訪賦示

寓樓相會送春歸，片々落花無力飛。留客尤宜亭午雨，免看窓紙上斜暉。

悼松齋翁

讀書何必泥文字，爲官不願錢穀吏。胸度宏遠識亦高，夙歲已抱經濟器。丙申以來國荐饑，府庫弊耗倉廩匱。大臣齷齪誤施爲，朝野嘖々多怨懟。特旨補翁相府，援國家大計一身萃。炯炯洞視弊所由，鋤姦除冗群臣悸。闔藩旋知向廉隅，苞苴不到權貴地。齊國師儉推晏子，唐室遺直重陸贄。教民七年可卽戎，政績相尋及武事。城東採練真偉舉，申明號令鮮旗幟。牙營金鼓響肅々，魚鱗鶴翼整位置。陣法再觀祖宗舊，故老相感暗含淚。恨不以此精銳兵，長驅向北衝虜騎。常曰必當有邊憂，預命軍曹脩糗糧。武帳器械久殘缺，一經緝繕便堅利。翁之先見如著龜，爾後江戶馳虜使。慨然許國論時宜，音吐如鐘迸吻呬。哲也辱知己有年，抗辯往復互攘臂。論罷呼酒共杯盤，天真爛漫見忠義。醉托文筆瀉磊塊，水箋墨痕勢橫恣。酒醒携手步庭間，喬松一樹帶晚翠。笑撫松身徐指陳，云是遠自鎌倉致。秋霜烈日嘗不凋，晚節常期與渠比。不知此意諗乃師，能爲老夫乞其記。哲也東役謁師日，話次第一致翁意。娓娓綴成數百言，霜縑自書見付卑。糊封迥欲托郵便，或恐長程竟捐棄。千里帶來對榻

看，行文頗喜叙交誼，豈計一朝暴溢焉。再會邈矣幽明異，長嗟不是爲私情。國家無人綱紀墜，多難復如丙申時。皇天何事不懲遺，難奈帶來一論文。却向人間代墓誌，

松陰忌書感

幾道封章血淚紅，分明隻手挽頽風。吾曹羞死有餘罪，漫以狂夫目乃公。

壬戌六月公駕西上，取道於木曾，時麻疹流行，從臣多疾，公駕滯信州，諏訪，命吏給醫藥，存撫切至，予則健食依舊，一夜過諏訪湖，長嶺志道二子亦至，割湖鱗沽酒，罄歡而去，歸寓則招參半矣。

吾有如虹氣，百沴亦逡巡。暑路追隊伍，赤脚度嶙峋。公駕幸無恙，千里朝帝闈。異候偏釀疾，感染惱庶臣。救護有恩命，醫藥存問頻。醫員體君意，刀圭期回春。君恩已如此，何人不致身。笑吾少檢束，百錢宰湖鱗。抵掌談亦劇，快辯驚四隣。況賞涼天月，呼支酌清醇。仰看天上月，大月光無垠。湖光與杯酒，相映均翻銀。歸來就寢席，醉夢落烟津。

乙丑十一月十八日將再赴藝州加藤有隣來叙別席上賦似

風霜千里出鄉關，欲爲邦家釋積疑。前哲于今典刑在，貫高賈彪是吾師。

十一月晦日對案事了兩大夫，上自判書，因有此作。

案成大義判錙銖，豈爲邦家惜此軀。幕府徵兵知底意，罪名應愧一辭無。

開幕府檄列藩徵兵，以本月十日爲期，時十二月九日也。

山陽陸續簇干兵，徵募應期倡進征。我輩不關威伏術，笑聞四面楚歌聲。

幕府步兵千人屯城下，彥根卒衛二十日。市大垣兵戍海田驛，紀州軍舍漢辨。

村敵兵四聚如挑戰者。

銃槍林立四成叢，身墜千軍萬馬中。一步出門無淨土，僧房寒雨臥清風。

十一月晦日書事

對案嘗無傷義名，邦家事歷本分明。嗚呼不借蘇秦舌，自有誠忠塞八紘。

丙寅五月遭厄中偶作

晨光連日太熹微，滿地陰雲掩客幃。鵲語何知楚囚意，向人謾叫不如歸。

囚室偶感

魂神一躍去升天，身後何遑營墓田。磔柱塗金非我願，好將腐尸砲烏鳶。

憶昨行寄懷西鄉南洲

風雪京城候騎馳，上林何識物萃移。記不寒夜草飛檄，相國門前畫策時。

春末書事

杏花時節雨聲多，適意人生無幾何。臥病況違吟社約，藥爐鼎畔二句過。

邸園矚目

菜黃麥翠一望均，鶯語丁寧向我親。百畝庭園不私有，等閒領略十分春。

似聞中禎卿

七年出沒死生間，生敢偷生死亦難。今日朝恩錄微績，一官得保一家安。

水邊晚步

雨餘新漲渡頭迷，戰水蒲芽嫩翠萋。鷗背斜陽紅未沒，漁蓑晒在柳陰西。

經高井村到大崎

一水遙々接海沙，白葦紅樹路橫斜。陶耕併業豐生計，不見窮民仰惠家。

友人竹田大尉以徵兵副使來于群馬縣相伴看梅龍海院山家秋景
黃菊丹楓正入秋寒風早已度林邱山童從此方多事昨夜新霜折栗毬

樂水園百絕之一

城西去訪郭駝家百卉生々橫又斜半架盆栽紅一片矮松接石榴花

安中驛贈根岸松齡

聞君揮劍手刀作萬酸辛衣食計全定還勝運甓人

癸未二月九日夜宿熊谷驛訪竹井澹如茗飲壁間揭隱元禪師詩次韻

賦一絕是日雪

相逢何道世途難談熟茶聲燈影間門外雪埋深幾尺風塵不許到幽關

甲申五月宿山田郡安樂土東校

樂土分村落東西民俗淳營生刀耕織戶戶不知貧

乙酉元旦

夙換朝衣待曉天家人秉燭拜新年穉孫尤是可憐處豫把屠蘇侍膝前

松陰遺稿序明治十二年十一月草

吉田義卿以兵學世祿於山口藩倜儻有大略年甫十八抵肥後訪宮部鼎藏弱冠
遊江戶見佐久間象山余與義卿同鄉年亦同在江戶義卿天質忠實虛懷接士所
交不論文人劍客而尤重鼎藏象山甲寅四月義卿以事下獄象山亦坐焉會鼎藏
在江戶余與謀歸財物於獄中以救賑之未幾鼎藏西歸余孤立且貧甲冑獲金數
枚以存問義卿居數月幕府出義卿於責附父兄然藩吏過慮又繫之獄於是物議
紛然因更幽於家義卿不爲意開塾講究名曰松下村塾高杉晉作久坂義助及品
川思父之徒親炙請業講尊攘之道方是時幕府大興黨錮之議捕有志之士義卿
憤懣上書藩老切言時事且建奇策欲刺幕府一權奸藩吏畏禍再繫之獄尋有幕
命護送江戶義卿自知不免訣別父兄以上途至則對案抗言痛斥幕罪遂斬于傳
馬街之獄初義卿之就逮也留其文稿分付門下此稿歸思父亦在其時則思父傳
之今日盖有不偶然者也噫山口藩士氣之奮義卿倡之首而晉作義助之徒爲之
後闔藩翕然知所向絕藩吏願望之念能專意於皇室者雖由毛利氏養士有素義

卿倡首之功竟居多焉然而義卿之徒陸續死事不及觀今日維新之盛豈非遺憾耶夫高山正之倡義於天明寬政間不幸客死西海朝廷嘉其志近有贈位之典至義卿身冒刀鋸門人子弟遵奉其說膏血塗地抵死不變遂使閩藩之士知大義明分之所在其功烈視之正之大小輕重果何如也而廷議未及追褒之甚可惜也義卿死二十一年思父刻其遺稿始公于世自此天下將知義卿氣節之慨能振興閩藩而門下之士能遵其說有樹立以馴致今日復古之盛嗚呼義卿雖死猶不死也頃者剗剛竣功思父屬序于余余之余固不足輕重義卿然知義卿者前後皆死非余其誰序之乃叙平生所知置之卷首

中村圓太殉難概蹟序 明治廿六年六月撰

余嘗謂鎮西之士慷慨尙氣自富於忠勇如平野國臣中村圓太二氏其卓然者矣抑余二氏性行雅知之特於中村情誼尤密因得悉其平昔君本中村氏諱無二稱圓太有東洲李不言齋等之號假稱野唯人父曰兵助世仕黑田氏好學通經史博綜武技君之兄用六士林中有錚々之聲君亦蚤露頸角年甫壯有所見脫藩遊江

戶入碩儒之門其學不拘章句常存心皇室文久年間憤藩論奏請來京師依毛利氏余時隨毛利氏在京其相知以是時爲始分癸亥八月七卿到周防君亦從之九月會黑田世子上京君辭七卿而從行入京是年冬藩論一變忌君舉動過激縛之京師以檻送博多甲子三月余以事赴長崎途出田代對馬藩士薦田某要余曰中村氏兄弟昨夜脫囚匿本驛我導君議後圖余隨某穿深林抵一民家與君相覲而泣焉且曰晝伏夜行來崎邸余徐爲計間一日君等果至余舍諸邸內禁他人交通自意崎奧距博多不遠捕吏追跡亦不可測不如海路遁馬關乃乘夜命船送到埠頭從此君入馬關再從六卿日夜淬勵以講尊攘之策甲子冬幕府檄諸藩徵討長之師君將就西鄉隆盛謀薩長連合同志者皆戒曰設令抵薩必莫入博多一朝就縛乎不獨訊鞠脫囚之罪禍及同志正義之士恐殲種子矣然君不聽同志中或應君速去君笑曰大丈夫曷畏一死我有所深謀而朋友故舊憤其執拗迫以屠腹焉實爲慶應二年正月二十六日年三十一君之末弟諱無可稱恒二郎脫囚之日致力居多其抵崎亦隨行京師之變屬久坂義助入鷹司邸揮長槍斃敵一人而死矣

嗚呼余知君兄弟平生友于與人接言語溫籍然論國家大計則聲共勵蓋忠義出於天性矣君在崎之日贈余國詩以表別意今猶存篋底當事之事宛然在目嗟焉爾後王政維新殉難者盡蒙收錄如君至拜贈位之榮地下之靈亦可以瞑也頃者福岡縣士江島氏輯君之事蹟以爲一冊寄余屬一言余之於君艱難流離有共境遇者序文之請豈可辭耶因記此以還江島氏焉

刻二物考序明治十五年七月撰

瑞臯高野氏以慷慨有爲之才隱於醫嘗著書論時事爲幕府所忌繫獄後脫獄迫走與捕吏格鬪而死矣先是瑞臯在縣下吾妻郡有二物考之著而其草之之時四方無虞年穀荐登一朝有丙申之災餓殍載塗瑞臯深慨之就二物演其効用使世人知備荒之不可闕焉抑如三熟蕎地方人民皆知其利獨至馬鈴薯則山村僻邑有未知之者故瑞臯詳說之又圖其真形而欲使人民知播殖之益用意頗功矣嗚呼瑞臯著此書在四十年前而如馬鈴薯則人々以爲不過備於荒歲而補貧民之食焉耳今也爲外賓之饗成饌之具必不可少之物則時世之變謂瑞臯先見之亦

奚不可乎現今吾妻郡之村落接淺間山下之地土質礮确氣候寒互諸穀皆不熟其適地者唯有馬鈴薯而已矣土人力播殖之收穫巨萬戶有餘貲亦不可少謂此書之惠余每偉瑞臯之爲人而悲其死於非命又喜此書之大裨民生特命僚屬上木以公諸世云

友人詩稿序明治二十一年五月撰

友人根岸翁累世家于武州青山以豪族聞於近鄉德川氏之末造勤王佐幕物議鼎沸翁特存心於王室與慷慨之士深相結余之與翁相知實在文久年間當時余從毛利氏寓櫻田邸舍翁屢來過有所謀其後毛利氏爲幕府所忌翁亦連坐禍殆不測是以音問遼絕生死不相聞維新之七年余奉職於地方赴熊谷縣也翁突然通刺余遽延於書室握手道舊曰不圖復見於地上爾後常々往來令嗣亦屢會見從是復得親問翁之起居今茲丁亥翁郵致所作絕句若干首請評隲且徵一言余受而閱之則賦田園之實況毫不涉虛構有石湖四時雜興之趣雖然如以辭句之末評其詩則非知翁者也余爲歷記往事以置諸卷首

藍園詩鈔序 明治十八年四月撰

藍園堀口翁以新田氏之裔居上州澁川驛喜讀書不求聞達世業染戶雖家匪貪勤於治生未嘗以吟誦廢事居常督職工教脫力傍子弟孜孜勉焉其學以敦行爲主一入其門者皆有所樹立凡上州一部落爲戶長爲議員苟有民望者大抵出翁之門矣翁讀書之暇好作詩詩皆實際毫不涉虛構綽然有古人之風固可傳也頃者門人等請翁刻其詩翁不許門人曰吾徒積金有年先生果不聽焉皆屬徒勞翁不得已付稿本乃請序于余余與翁交日久於其平素知之最熟矣雖門人之舉固將慫恿之也蓋上毛之爲地人氣豪爽自古出偉人如高山正之世人所周知今不必說前後於正之而起者又有高橋道齋市河寬齋吉田子正皆以德行奇節知名於一世近時如橋本香坡上州人士之尤錚々者翁固其流亞而學行比之於前人殆無軒輊而忠厚之氣發於詩者藹然不可掩焉世之詩人鏤刻花鳥嘲哂風月者曷可同日而語耶嗚呼翁學識淵博詩固緒餘爾然亦因此可以窺其學之一斑則門人之舉果不屬徒勞也是所以余不辭而序之

修大內義興墳墓碑 明治二十一年十一月撰

周防之山口爲大內氏之墟大內氏居此蓋九百餘歲矣文久辛酉贈從一位毛利公巡封內至山口告臣僚曰大內氏於我有舊誼況我家繼大內氏而領本地如義興有功於當載史傳然其兆域之不掃寡人有責汝等速議封修於是有建碑之命乃以撰文見囑余因按史曰大內之先出百濟始祖曰琳聖歸化到周防上韮濱移山口琳聖實爲義興二十五世之祖焉義興承父政弘後爲周防長門豐前筑前安藝石見守護當時屬足利氏末造細川政元爲管領恣議將軍嗣而遇將軍義植無狀明應九年義植出京師來於山口依義興永正八年義興奉義植入京師與細川澄元戰於船岡山而敗之復義植於京師退居於泉州堺尋而請歸國不允十五年至自堺大永七年十二月二十日薨於山口葬中尾村抑大內氏歷世奉守護之職至義興威權之盛一時出管領之右其奉義植入京師也謂之義戰亦可矣然而後世其鬼不祀墳墓之域荆榛蕪沒有情之人過之則有不可忍者豈毛利公亦有感於此耶况隆元卿爲義隆之女婿則其於義興有王父之義乃封修之舉謂之義務

所存固無不可也頃者正二位元德公拜先廟至山口促余撰文嗚呼元德公能繼父公之志者而余一受囑遷延至二十餘年之久者蓋遭際時變有不得已者今也海內寧謐余亦幸不死因追序前年之事授筆係以銘

鳳山之麓 山口之鄉 內氏之祖 創定封疆 繼々承々 九百星霜
間出英傑 戰略異常 船岡之役 嚮義知方 勅敵悍將 心膽沮喪
盛衰有命 人事滄桑 毛公垂念 感情悲傷 捐貲建石 情義兩彰
自今宰木 永免斧斨 名族之蹟 與天壤長

益田君祀堂記 明治二十五年十一月撰

明治二十四年冬勅賜故右衛門介益田君贈正四位蓋褒其殉難也既而君之舊臣等具狀來請祀堂記按狀君諱親施小字幾三郎稱越中又彈正後改右衛門介其至出於大織冠鎌足鎌足三十二世之裔曰大納言國兼始稱御神本氏國兼二十世諱元祥稱牛庵始仕長藩自是累世列老臣考諱元宣稱玄蕃當路頗成績君以其第二子承家爲人俊邁才兼文武藩主忠正公甚器重焉是時幕府令藩兵戍

相州海口君膺總奉行之選赴任相州安政乙卯役滿而還丙辰四月遷職役職役者任重而職劇非暗練國務者不能當其選也君起視事同士庶開言語舉賢能明賞罰勸忠孝中外翕然稱善治丁巳二月移病辭職公命力疾視事居一年復請辭免不聽文久壬戌六月公東觀將就國時幕府屬多故列藩各陳意見而朝廷幕府和戰異議幕府令公入京停調先是公命長井時庸艸意見奏上之而時庸所草言涉不敬朝廷有所責問至此君先公駕入京謁當路公卿百方分疏乃得前疑寢釋矣癸亥二月公就國尋遣君入京有所建白無何宸勅汗發將行幸大和廷議命君以學習院御用掛八月驟有堺町之變逐我藩士在京者藩士驚愕不知所措君退京邸至大佛議進止知勢不可爲微行抵浪華九月八日達山口翌年改元元治六月世子將訴冤闕下先期命君入京此時藩士憤前之變出於姦黨猜忌欲籍兵力以降其首領脫走入京君在伏見百方慰撫而議論激昂勢不可阻十九日大舉向九門而敵勢猖獗我兵不利一敗塗地於是君收殘卒還采邑須佐待命無何幕府問罪使德川慶勝帥師來討君坐事賜自及焉實爲甲子十一月十二日享年三十

二慶應乙丑舊臣等合議建祠曰笠松社公賻金壹百圓資祭粢嗟夫曩者非君犧牲一身以解國紛則毛利氏社稷安得有今日況君死二十有餘年朝廷嘉忠節特贈位階合祀靖國社歲時賜官祭所謂天恩及枯骨者君地下之靈宜瞑而舊臣等哀悼之念亦足以慰矣君有二子長曰精次郎次曰武熊精次郎嗣後余嘗與君同勞國事幸得全首領而至今日記文之請詎得辭耶君報國事蹟有待後世史傳今不復贅焉

平成輔碑明治二十年八月撰

函嶺之巨浸溢爲澗流東注十里至小田原入海其與潮合處白沙堆積民屋散布謂之早川村傳曰地有不淨松者在昔宰相平成輔遭害處云按史元弘元年笠置城陷翌年成輔爲賊兵執送鎌倉已而道殺之實爲其年五月二十二日也願以松下爲刑場有是名矣嗚呼元弘之亂倒行逆施舉海內不知名分爲何物故高時暴戾皆視而不恠獨成輔與源具行等謀糾合義旅謀誅之者義有足動人然而後世亦無爲成輔道者地方有志某等有慨于此欲建碑于松下以昭其遺跡而歲月之

久松樹枯朽遭害之處不可知焉乃更卜地建碑屬余記之於是成輔事蹟始著於世千載之下使人低徊咨嗟則有志者之舉不亦偉耶南朝之事係世道人心余所以喜而援筆

大谷休伯碑明治十七年三月撰

今上卽位之十有四年置農商務省尋設山林局大張林政明年舉山林共進會令國內有功於森林者不問其人生死盡錄上焉於是故大谷休伯膺三等賞賜金星銀盃於裔孫熊倉某以嘉其功嗟夫休伯而不死也抑休伯者族籍鄉貫無記傳可徵或謂天文年間仕上杉憲政任地方之事焉憲政居上州平井城休伯憂州多不毛地而居民亦寡按水理通溝渠以便灌溉於是得水田數百町矣又相土性籍其尤粗惡不適菜穀者以爲殖林之地且州內乏松樹獨太田金山松樹蕃茂乃抽穉松數十萬株於金山栽之曠野翫事於永祿元年經二十年荆棘之地化爲茂林卽今大谷官林是也夫天文永祿間天下擾亂群雄割據使休伯効力於兵馬乎割據一方亦非所難也乃舍彼取此意其人雋偉非胸中別有所見者安能如此乎余嘗

過平井村視其城墟荒烟野草僅認廢濠到邑樂郡經所謂大谷原則喬松林立蒼翠亘數里其西有休渠者引渡瀨川縱橫分流每播種之候深湛汪洋至今數十村賴其利焉蓋方憲政襲父祖遺業號令關東可謂盛矣然而後世子孫歸於湮滅其鬼不血食休伯在當時雖無封爵之可記數百歲之下土人懷其德朝廷追賞其功則視之上杉氏得失果何如哉余益信威力之不可恃而德惠之不可忽也館林之地接大谷原松林中有休伯墳頃者土人相謀修之卜地於躑躅岡記其事于石以傳不朽介郡長村山具瞻乞余文休伯余所嘗欽故不辭而書之

山口君墓碑明治二十一年撰

君名直稱薰次郎後改兵部世住山城國葛野郡川島村爲其著姓文久慶應之間勤王佐幕物論鼎沸君有志於時事結交四方苟有爲人而無刀者爲賑恤之乃因君仰衣食者不知幾何也當時幕政猜忌其不利己者窮逮無遺君亦在逮籍捕吏索君急君所在潛伏逮吏就其宅蹂躪暴掠累及妻孥君避禍走大和之周防投毛利氏崎嶇艱難居二年值明治維新前被窮逮者始得安堵君復京師至家則家財

蕩盡無以爲計而其執志益確出入於公卿間奔走不倦明治二年朝廷錄功賜祿四人口尋列京都府士族六年四月以事至東京無幾罹病以十月十七日歿享年五十八葬四谷西念寺君爲人忠實嘗師森田節齋讀書有來歷當事能耐故有志之士就君詢處置蓋其爲幕府所忌非偶然也今茲二十一年君三子義德携狀至自西京謁余請碑文余與君相識義不可辭乃叙生前行爲係以銘銘曰
嵐峽之下 西岡之鄉 茲產志士 其德溫良 一意愛國 嚮義知方
時運漸泰 逐回皇綱 官錄其績 死者有光 嗟桂濱宅 山高水長

野村望東尼墓碑銘明治二十六年五月撰

丁卯之冬幕府傳旨召長藩別封及老臣於大阪藩兵屯駐各地者請從行藩議可之衆屯華浦開洋有日會望東尼來防府舍菅祠絕粒週日以祈一行福利遂疾寒胃客死於華浦焉後二十五年三條內府念其以一女子盡力國事託余重修墳墓因爲之銘曰尼名茂登筑前福岡士族父曰浦野重右衛門尼其第二女嫁野村新三郎生四子皆天新三郎死剃髮號望東尼尼爲人明慧鍼帶中饋能執婦道尤好

國詩善筆札初新三郎之致仕也卜地城南平尾山中夫妻隱居縱心林泉歌詠唱和超然於塵壒之表已而新三郎死尼遊京師歷覽勝地間出入公卿之門與名士交是時德川氏政衰勤王佐幕橫議紛錯而志士往々誘尼以參其議有司忌之拘尼處流以絕關係是時高杉普作督隊兵在赤間關命部下奪尼於配所匿於賈人家後移之山口及大阪議起尼來華浦居無幾得疾危篤之報達山口藩主遣侍醫存問然醫藥無効以其年十一月六日歿年六十二葬山口縣佐波郡桑山西麓至明治二十四年冬朝廷錄前之勞國事者賜位階而望東亦在其列贈正五位踵而墳墓重修之舉聞內廷皇后賜五拾金而毛利三條諸公各捐資助工事竣其功余亦得完結內府之囑因略記尼之偉蹟繫之以銘

平尾之山 峯巒逶迤 名媛棲此 絕跡城市 其所涵養 志等烈士
身在絕島 泰然樂只 囚室家居 險夷一視 宸闕表勳 彼蒼降祉
天定勝人 循環有理 吾人鑑此 知所興起

松田謙三碑陰記 明治二十四年五月撰

弟謙三初名健作字士健號鯤堂毛利氏之臣松島瑞蟠第三子幼養於小倉氏後有故而去漫遊四方賣文自活有酒性不規規繩墨是以終身坎坷晚年於東京從事於毛利氏之編輯儼居芝區雙椏街明治二十四年一月十四日以疾歿享年六十一葬區內瑞聖寺

仁保津村墾田記 文久年中撰

樵野川在防州吉敷郡發源山口至小郡入海仁保津村當其下流水勢浸衍田圃圯壤爲害不尠先是官屢賜粟以賑其地天保壬寅嘉永庚戌水滂雨次舉邑昏墊有里正政恒者慨然策之謂水害天地不可以人力爭不如別開墾田以此所得償彼所失邑中有高丘可墾而苦無水隔山有一溪々曰入浴山曰椎木全峯皆石鑿焉而後水可溉矣於是大興徒役以穿水道則石心盤據椎鑿不入衆皆束手事皆中止政恒甚憂之沈思累日乍見一翠鳥來啄地造巢感曰鳥猶如此人何不可爲乃再督徒役且鑿且勵終得石理脆鹽蚤緣剗削工遂畢矣實嘉永二年九月五日也渠長凡八十餘步名大鑿便乞官許大造隄防引溪水于其中得田凡數十頃別

又穿渠千四百步餘分爲二派鑿一小山通焉是名小鑿灌白田爲水田又得七町餘縣令聞之厚加賞典其年某月於上仁保津村新築一堤蓄水以墾田數百畝明年又於隣鄉三條岡村以算行水高處以開山田一町六反餘於是向之烏鹵沮洳悉變爲良田沃土嘉穀生焉蒼生育焉三村八十餘戶大受其利老幼婦女胥誦政恒之功不衰安政六年君侯賜米二苞賞之亦異數也嗚呼正經界制田里而盡地力資富強在建國者所宜急也抑使吾防長二州之民皆如政恒用心則山可移矣海可填矣然後從施教養之法雖至治亦或可庶幾焉頃邑人相謀欲建石以不朽其功屬文余余固嘉政恒之用心也不辭而書之政恒姓林通稱勇藏久爲仁保津村里正閩邑推服如其爲人父老口碑存焉吾不復贅

書仁保津村墾田記後明治二十三年五月

余嘗爲勇藏林氏撰其墾田記距今殆二十年矣昨年四月歸山口縣經吉敷郡途出仁保津訪林氏林氏迎余懇囑曰文久年間贈從一位敬親公養痾於湯田澡泉數旬特過本村巡視墾田後正二位元德公亦來觀新渠並賞功賜物焉至明治十

八年聖駕之巡幸本縣積年勞農事之狀達叡聞賜絹一疋朝恩藩命前後數回野人一身荷此恩榮不亦大乎願前所撰記文補此一事則勇藏死不朽矣余諾之遷延不果頃促之尤急蓋林氏本年七十八而縣下舉老農必推林氏至其恩命之榮則陰德陽報有不偶然者余與林氏交久焉況有前年之約乃書此郵寄之

三條公肖像引明治二十二年十月撰

梨堂相公在宰府使畫工梅仙寫肖像時公年三十二志銳氣壯膺台輔之任蹇々匪躬爲時論所景仰而幕府忌之陰事以他事遂有堺町之變實爲癸亥八月矣公乃與同志六卿下周防依毛利氏而毛利氏之部下人心激昂或脫走抵闕下欲有所分疏焉甲子十一月幕府名毛利氏之罪進兵其境上是歲公與同志遷宰府矣嗚呼宰府之行在公爲畢生之窮厄然而余則謂明治中興實胚胎於是時也其窮厄者天所以啓公重任之地矣今觀此圖丰姿溫雅雖際於關間流離毫無戚容非公之胸襟險夷一視綽然有餘地安能如此耶其贊維新之隆邛而致有今日固其所也當時余奉毛利氏之使屢往來於宰府得親候公起居今公使余題一言蓋出

記念之意而余亦有不可辭者焉

跋麻田翁手寫山口城圖明治二十三年十二月撰

嗚呼元治慶應在我毛利氏爲遭厄之年矣有爲之士以此間殉國不知其幾人也而公輔麻田翁亦居其一焉翁爲人簡默多識尤通吏務遭厄之際翁參藩政八面膺紛劇毫無滯滯及移城議起左提右挈率先區畫之鑿々中窾蓋山口之地故屬大內氏之墟四方皆山從古稱要塞翁以爲築城之地獨山口爲然於是跋涉相地到處抽墨計山川之向背道途之便否盡貌取以具考據如此圖卽是也今監軍三好君帶職務抵山口縣途次過萬代氏話及翁之事主人出此以似君君愴然懷舊請主人携歸以將供記念而以余亦知翁屬余題一言余受閱之命筆縱橫有任古昔之感者然而如君以現在陸軍部之重職其所感觸必有勝於余者乎萬代者住山口市業旅店翁在山口久寓其別室故傳遺墨至今日亦非偶然也

書松陰要駕策後明治二十三年九月撰

此一篇是松陰畢生之大策也尙記當時余抗其議極論數回而議遂不諧松陰密

論和作之京師而篇中士毅白之政府追捕和作逮其兄子遠固爲事實矣其君子而爲小人行吾憎之過小人云々之言余雖不能無慊焉亦不必辨之蓋松陰平生議論峻嚴如此篇是其本也然松陰不以此斥余以余之言爲成敗論余亦深服其公平矣松陰之與余議論不合者每々類此而終始全交者其局量宏遠非容余之愚安能如此耶卷末手簡有房杜之文雖似戲言亦前日所抗論至此結局者磊々落落真有丈夫之氣象嗚呼是所以爲松陰乎

跋久阪義助文稿後明治二十六年三月撰

是卷爲久阪氏所草而欄外朱書係吉田松陰氏之評語墨書者爲口羽氏矣口羽氏名德祐其於久阪氏爲切磋之友作文賦詩必往復評騭傾倒不遺焉今此卷亦足視其一般也後吉田氏斬於江戶獄久坂氏殉於京都獨口羽氏齋志而死天若假之年則與久阪諸氏并馳駢駕將大有爲焉其死殉可惜也頃者中所君裝此爲卷軸徵余題言夫君爲穴戶翁之外孫翁固傾心於王室者如久阪氏皆推翁爲長者如此卷歸君之家有不偶然者君其珍襲之

書久阪義助手簡後明治十二年五月撰

文久年間幕政萎靡有志之士所在結合欲有所爲根岸翁拔身於田圃廣與有志交翁之名噪於遠邇有志之士暴風而至者不知其幾何如此簡足以見其一班也余之與翁相識亦在其際矣甲戌之夏余之來于熊谷縣也翁突然通刺余延之燕室抵掌談舊而別時翁託家事於嗣子武香隱居稱友山武香亦屢來而修舊好茲歲五月武香袖此簡來群馬之儼居致翁之意曰願獲君之一言以徵之他日因叙余與翁交際非一日者置卷尾

題舊宅圖明治二十五年八月撰

戊辰一月王師敗東軍於伏見長駟達華城連戰全勝王政復古之業成矣當時余督毛利氏之兵在京師至三月報捷復命毛利氏居無幾相地天津郡以爲歸休之計此宅卽是也後間二年朝廷徵余補足利縣七等出仕從此歷任熊谷群馬兩縣奉職地方十有一年矣而舊宅荒廢房廊墻塼爲蛇鼠之窟殆不可修葺焉吁余老矣歸休之念日切一日乃命兒道明毀舊宅在大津者移之今地道明拮据經營閱

數月竣功頃者會暑中停業省親于鄉國且視宅舍之工事三郎携此圖歸報曰願大王父有一言因以題圖上後之觀者庶幾知此宅興廢之所由耶

大正... 昭和... 遺稿... 四百八十四

昭和六年八月二十日印刷
昭和六年八月廿五日發行

輯取家文書第一
非賣品

不許
複製

編輯者 東京府豊多摩郡杉並町大字高圓寺
四百十八番地 大塚 武松
東京市四谷區新堀江町三番地
日本史籍協會代表者
發行者 早川 良吉
東京市京橋區新湊町五丁目一番地
印刷者 高橋 赤次郎
東京市四谷區新堀江町三番地
發行所 日本史籍協會
電話四谷三二八七番
振替東京三九四五番

64
258

終